

だう	堂・棠・墜道・導・橈・樟。	にう	柔。
たふ	苔・答・割・塔・搭・沓・踏・榻・蹋・闕。	にゆう	乳。(又ハにう)
だふ	納・納。	にふ	入。
とう	斗・偷・透・投・兜・統・董・叢・豆・逗・痘・脰・豉・冬・疼・柎・葵・等・桶・東・凍・棟・桐・洞・洞・藤・藤・膝・騰・讀・頭・登・燈・鏡・橙・開・寶・騰・筒・恫・槌・橙・磴・媮・鎗。	によう	ニヨ 女・仍。
どう	同・全・洞・恫・桐・洞・銅・童・撞・撞・撞・撞・動・働・働。	ねう	尿・溺・溺・邊・撓・繞・饒・鏡。
ニユー		ねふ	捻。
		なう	ノ 腦・惱・瑤・囊・囊。
		なふ	納・納。
		のう	農・濃・膿・能。

ひやう	平・坪・萍・評・兵。	はう	萌・貌・暴・曝・防・妨・坊・房・旁・傍・紡・滂・勝・訪・夢・榜・彪・彪・澎・澎・澎・髦・蚌・毛。
びやう	井・竝・屏・病・鏝。	ばふ	乏。(又ハばふ)
ひよう	氷・冰・馮・泥・憑。	ほう	逢・峰・峰・蓬・蓬・烽・鋒・縫・奉・俸・捧・棒・朋・朋・緇・棚・鵬・剛・封・幫・培・劑・鳳・豐。
へう	表・俵・粟・剽・標・勳・漂・嫖・飄・標・縹・縹・縹・縹・殍・豹・鏝・鏝。	ほう	矛・裘・某・謀・賀・棒・劑・昨・呆・戊・牟・伴・夢・整・懋。
べう	苗・描・貓・貓・貓・秒・眇・渺・廟・廟。	ミヨ	
ほう	ホ 包・抱・咆・泡・庖・胞・炮・砲・袍・跑・飽・鮑・飽・匏・抱・保・葆・堡・椶・褒・褒・彭・澎・方・仿・妨・放・芳・放・舫・舫・榜・髮・寶・拋・邦・報・萌・幫・緇・龐。	みやう	名・茗・命・冥・明・暝。
ばう	亡・忙・芒・忘・妄・虻・銜・罔・望・冒・帽・茅・卯・耄。	めう	苗・貓・妙・妙。

富	冊	婁	倏	京	亡	並	万
富	冊	婁	倏	京	亾	並	萬
野	坂	囁	叶	瞭	廝	廁	勅
野	坂	囁	叶	瞭	廝	廁	勅
蜂	峯	峩	岳	婚	娉	姊	妍
蜂	峯	峨	嶽	婚	聘	姊	妍
慙	愠	忘	微	強	弊	弊	庵
慙	愠	忘	微	強	弊	弊	菴
稿	楫	棕	碁	案	柿	村	普
藁	楫	棧	棋	按	柿	邨	普
狸	貉	無	烟	熅	汗	毘	概
狸	貉	无	煙	溫	汚	毗	槩
紕	糾	粽	筍	筍	競	稿	砧
紕	糾	糉	筍	筍	競	稾	砧
荒	花	艫	舩	緼	緼	網	窓
荒	華	櫓	船	緼	緼	網	窻
跚	鋏	踪	谿	譁	訛	衽	虱
蹠	鐵	蹤	溪	嘩	譁	衽	虱
		駟	雞	雁	陰	鏹	鋒
		驅	鷄	鴈	陰	鏹	矛

五 同字表

圓	噴	噐	唇	叙	収	双	厩	厨	即	卑	苜	勺	効
回	噴	噐	唇	敘	收	雙	廄	廚	卽	卑	刈	勺	效
恒	往	廻	廩	弁	弁	帽	尅	寶	寇	冤	墻	塚	場
恆	往	廻	廩	辯	弁	帽	尅	寶	寇	冤	牆	冢	場
晉	昂	既	整	搆	搆	插	拔	拿	拘	戲	載	懣	懣
晉	昂	既	整	搆	搆	插	拔	拏	拘	戲	載	懣	懣
潛	濶	淺	涅	沒	冰	毒	殺	殲	欸	楫	朽	杵	杵
潛	闊	淺	涅	沒	冰	毒	殺	殲	欸	楫	朽	杵	杵
痴	畧	留	画	瓊	玄	斷	体	猷	猫	猪	猿	熔	焔
癡	略	畱	畫	瓊	玄	斷	體	猷	貓	豬	猿	鎔	焔
箴	箴	豎	竊	秘	頤	穎	稟	碍	砲	盜	蓋	盃	鼓
箴	箴	豎	竊	祕	頤	穎	稟	礙	礮	盜	蓋	盃	鼓
膝	腸	脉	胆	犂	耻	羸	羸	罰	經	織	紀	穀	粘
膝	腸	脈	膽	犂	恥	羸	羸	罰	纏	織	紀	穀	黏
覽	蒨	衰	裡	衛	蛩	萌	莽	艷	館	舖	阜	致	臥
覽	蒨	衰	裏	衛	蛩	萌	莽	艷	館	舖	阜	致	臥
針	釜	隣	輒	軟	賡	贊	賓	豹	象	讎	讎	記	解
鍼	釜	鄰	輒	輒	賡	贊	賓	豹	象	讎	讎	記	解
		鶴	鬱	闕	闕	麵	馱	隸	隙	隔	隔	問	鎖
		鶴	鬱	闕	闕	麪	馱	隸	隙	隔	隔	問	鎖

餘論

第一章 漢字の起原

黄帝の史官蒼頡サウキョウが鳥跡を見て文字を作つたといふのが、支那文字の開祖として、先づ一般に信じられてゐる古からの説である。さりながら事は既に太古に屬し、文獻の明かに徴すべきものがないので、其の創製が果して何人の手に成りしか、又如何なる事情に由りしかは、何人も容易に之を斷言し得るものではない。

唯興味ある問題として、學者の想像に俟つのみ。かの太昊伏羲氏の世、己に八卦を畫し書契を造り、以て結繩の政に代ふといふより推せば、既に己に文字が行はれてゐたものとも考へられる。されば文字の創製は、遠く三皇の以前に遡つて其の萌芽を認むべきである。寧ろ蒼頡に至つては、其の整齊の成功を收めたものと言はねばならぬ。

勿論これ等はすべて原始的の記號であつて、廣く一般に使用せられたものではない。後世の所謂文字と稱するものは、周に至つて始めて完成の域に達し、廣く日常の記録一般に使用せらるるに至つたもので

ある。ラクベリーの説に據れば、支那文字は恐らく、古代メソポタミアに發達したる楔形文字、即ち矢形文字の變化したものであらう。そして、易の八卦はそれら古文の字書であつたらうといふ。固より古代文字が繪畫的で、今日の文字との相異甚だしく、象形の外に出でなかつたことは、現存せる殷代古器物の銘によりても一斑を知ることができる。又かの天地の法象と、鳥獸の文章とを見て創つたといふ易の八卦とも類似の點がある。且又漆を以て書かれたる圓大尾小の蝌蚪の文が、メソポタミアの楔形文字の如き形に於て、ラクベリーの説も一概に否定することはできない。然しながら、これを以て直ちに漢字の起源を楔形文字に索めることは早計の批難を免れない。

此の故に吾人は、只此の二者の間に、斯くの如き近似點の存することを知ればそれでよいのである。因に蝌蚪文と籀文とは、漢人の所謂古文にして、近代、實に清朝乾隆年間の研究によりて明かにせられたものである。

第二章 六書

文字構成の原則と、其の使用上の法則とを論ずる字原論を六書といふ。即ち文字構成の六大原則の謂であつて、こは古、周の世に既に盛であつたことは、周禮に徴して明かである。六書を又一に説文學といふは、説文解字に論述してあるよりいふのである。即ち象形・指事・會意・諧聲・轉注・假借の六目がこれである。

(一)象形 物象を寫生したるもの、即ち繪畫の發達したもので、漢字は實に此の象形を基礎として、漸次に構成發達したるものである。日月水などの古文に就きて視るに、日は圓形、月は弦月形、水は流動狀を寫したるものにして、その他、山川艸木耳目口手子女人民蟲魚鳥卵門戶君臣等の文字も、皆これによりて形成せられたのである。宋の鄭樵の説によれば、六書文字二萬四千二百三十五の中、六百八が象形文字であるといふ。

(二)指事 象事ともいひ、無形の觀念の象形すべからざるもの、即ち事物の性質、思想の無形の内容を表現せんとするものにして、多くは既成文字、象形の點畫を増減し、又は方向を轉じて作る。一の上を一を加へて上とし、下を一を加へて下とし、木に一を加へて末とし、木とし、或は月の方向を變じ、一畫を減じて夕とする類は、何れもこれに屬する。一・二・三・四・五・六・七・八・九・左・右等も亦同じ類である。これ等の中には、純然たる記號に過ぎないものも、勿論あることを記憶せねばならぬ。

(三)會意 二個以上の文字を結合して、新字を造る方法にして、火を重ねて炎とし、人言を信とする類である。同字を結合して造れる文字、林森炎赫焔等の如きを同母會意、又は同體會意といひ、異體文字を合せるもの、位仁信、僞里男和好の如きを異母會意、又は異體會意といふ。異體會意の中、既成文字を其の儘合せる成文會意と、原形の一部の點畫を省きて結合する省文會意とがある。目の上に手を翳

して看とするは成文會意にして、老の匕を省きて孝とするは省文會意である。

(四) 諧聲 形聲ともいひ、二個の文字を結合して一個の新字を造るに、一は其の象形若くは性質を示し、一は其の音聲を示すものの謂である。例へば箭の竹は象形にして、前は音符、鶴の雀は音符、鳥は象形、江河のシは水の義にして、工可は其の音を示すが如き、此の類である。漢字五萬の中、十分の九は諧聲によりて成れるものである。蓋し諧聲は、繪畫の傍に注釋を施し、若くは其の名稱を記入したるものともいふべく、象形の意義を知るには最も便である。これは六書中主要なる地歩を占むるものである。

(五) 轉注 此は次に述ぶる假借と共に造字の運用に關する原則である。即ち既成文字を、其の原義と類似する方面の新たな意義に轉じ、音を變じて作るものである。一字にして數音多義を有するものは、何れも轉注の方法によりて、文字の使用を擴充したるものである。かぜの義なる風を轉じて、風習風教風刺の風とし、金屬なる金を、金石(樂器)・金錢(貨幣)・金革(武器)・金城(堅固)の義とし、善惡の惡を憎惡の義として、音をテに轉ずる等は皆此の類である。轉注による音は必然變化するものなれども、間、義のみ轉じて其の音の變せざることがある。金・風の如きは即ち此の例である。

(六) 假借 既成文字を借用して、新たな意義を表示する方法である。即ち言語のみありて、これに充つべき適當なる文字の存在せざる時、其の音と一致する既成文字を無意義に借用して、其の物を示す方法である。此の場合漢字は全く表音文字として使用せられたもので、全く字音と思想との聯想の上に成立したものである。燕は鳥なるを、燕樂としての宴に用ひ、皮革の革を革命の革に用ひ、俎豆の豆を菽の義に用ふるなどは、皆この假借である。外國音を記すことも、忌諱の上より同音の文字に改むることも亦これに屬する。凡そ假借は一字を以て一語を表はすものなれども、往々一音を延して二字とし、又は二音を約めて一字とする事がある。何不を盍、之乎を諸、之焉を旃とするが如きは此の類である。此に注意すべきは、漢字の構成が單に六書の中何れか一にのみよるものであるとの誤解を生ずることである。一字にして二つ若くは三つ以上の原則によりて成立したるもの少なからざることを記憶すべきである。

第三章 漢字の發達

繪畫文字が今日の如き楷書となり、行書となり、草書となるには、幾多の變遷を経過したものである。周の宣王の太史籒が、古文を變じて大篆即ち籒文を作るに及んで、黃帝以後一千年にして、蝌蚪文字の一大變遷を見るに至つた。秦の丞相李斯は小篆を作り、各國の文字を統一して同文同軌の制を立てんとした。同じく秦の始皇の時、上谷の王次仲は八分を作る。八分は小篆を幾分か簡便にしたものであるが、八分の稱呼に至りては、古來種々に説を立てゝゐる。又秦の獄吏程邈は、更に八分を省略して隸書を作

つた。清の顧炎武の音論に「大小篆よりして八分生じ、八分よりして隸生ず」と曰ひしは、書體の源流を説明したものであるのみならず、唐の杜甫の李潮八分小篆歌に「大小二篆八分を生ず」と曰うてゐるのも亦然りである。後漢の元帝の時に章草といふものが行はれた。これは史游が隸書を變じて書寫に便にしたるものにして、章草の稱呼は章奏に用ふるが故であつて、後世の所謂楷、行、草の草體といふ意義ではなく、寧ろ楷書に相當するものである。降つて後漢に至りて劉德升は行書を作り、張伯英は草書を作つた。蘇東坡が楷行書の源流を論じて、「眞は行を生じ、行は草を生ず、眞は立つが如く、行は行くが如く、草は走るが如し、未だ能く立ち能く行かずして、能く走るものあらず」と曰ひしは、所謂章草が楷書であるの消息を洩らすものではなからうか。

以上述べたる如く、黃帝より五千年の間、周に稍整頓せられ、秦に補はれ、漢に略備り、後漢以後楷書は一般に大なる變化なく、二千年後の今日まで踏襲せられて來たのである。大凡そ文字の變遷は此の如く、而して何れも單に一人の創始に成りたるものとするよりは、寧ろ自然の趨向により、時代の要求によりて發生し、漸次に變化し發達したものとするが至當である。漢唐以後は全く文字の改廢の急遽なる變化なきが如くなれども、其の變ずる立場よりしてこれを觀する時は、世界が一瞬だも變動せざることなきが如く、時々刻々推移變遷して止まないものである。但言語に比するに、文字は容易には其の形體を變じ難けれども、言語の變化するに隨ひ、其の影響を受けて、字體は變らざるにしても、字音は餘儀なく變

化する。且つ古代は筆紙の發明なく、纔に竹片を編みて之に漆するに過ぎず、これが書寫をなすもの誤謬多きも亦推測するに難くはない。尙又長き年月と、廣き土地との間自然に點畫増減が行はれて世俗通用の文字を生じ、古の文字の別體をなすに至るは、生命ある文字の必然の勢である。かくて世上數様の文字ありて、所謂正字俗字本字略字の區別を見る。吾人は其の使用上より、字畫の簡略にして、書寫に便なるもの擇ぶも可なれども、文字の正確と統一とを主眼とする上は、正音に據り正字を用ひ、なるべく典據を古に求めて、俗字略字訛音を避けねばならぬ。更に學究的態度よりいへば、古今正俗、其の本源と通用との兩方面に互りて、所謂故きを温ねて新しきを知り、以て當世に處する臨機の方法に出づることを望むものである。

徒に古をのみ正とし本として、固執するは愚の至である。大體文字は思想發表の要具なるを思へば、拘泥の餘り、本來の意義を没却するが如きことがあつてはならぬ。されど文字を忽にして思想の正確を期するは、猶木に緣りて魚を求むるの類で、矛盾も亦甚だしい。其の據る所なくして、獨斷的に行使し、若しくは訛誤を踏襲し、或は惑々正字の簡便を措きて奇字を用ふるが如きは、大に戒慎すべきことである。即ち文字は外に見はれたる思想にして、思想は内に隠れたる文字である。思想を正確に簡明に發表し、且つ理解し得て遺憾なくば、文字の用は終れりといふべきである。

第四章 漢字の特長

漢語が他の國語と全く其の趣を異にする點は、其の單音節より成立することである。言語學上所謂孤立語 Isolating として、日本語の如き粘著語 Agglutinative 印度語系統の屈折語 Inflectional とは大に異なるものである。されば接頭語 Prefix 接尾語 Suffix の形式なく、又語尾變化 Inflection の形式もない。文母子友、兔、鳥等の如く皆單音節を原則とする。或は數音節より成るものありとするも、こは畢竟單音の集合に外ならぬのである。而もかかる單音節の語も、平・上・去・入の四聲（北方は入聲を缺きて平を上下に分つ）の區別によりて、各音調を異にするが故に、同一母父音の配合あるも、決して混淆する恐はないのである。右は言語に就きて述べたることなれども、文字は視覺に訴ふる言語なれば、これを文字に適用して謬らないのである。

支那語は孤立語であるといつた。而して接頭・接尾語尾變化の形式がないといつた。實に支那語即ち漢字の特長は此にある。されば同一文字にして、種々なる品詞に使用せられてしかも全く形を變ぜざるが故に、動もすれば其の何れの使用なるかに迷ふ。吾人は常に其の使用を明むる爲めには、上下の文勢と其の文字の位置とに注意を怠つてはならぬ。例へば、辟は、名詞・動詞・形容詞等の十五音義を有するが如き其の著しきものである。漢字は久しく我に用ひられて已に我が國字となり、國語を寫して甚だ便を

得る。漢文も亦殆どこれと同じく我が文章の骨子となれるものなれど、猶これを漢文として、特に構文上の研究を要する所以のものは、人情風俗が國によりて異なるが如く、其の言語の構成上にも大なる相違の存するが爲めである。

我が漢文直譯體の文章は、殆ど全く漢文と相一致するものの如くなれども、仔細に點檢すれば、邦文は猶邦文の法に支配せらるるものである。されば漢文の解釋に當りて、邦文に求むべからざるものまでをも、徹頭徹尾邦文の法によりて試みんとするは、實に漢文の性質を解せざるの甚しいものといふべきである。勿論國語との一致を求めてこれが解釋を施すことは、望まじきことではあるが、國語の異なるが故に思想表現の方法にも亦自ら差異あり特色あることを知りて、そが解釋上の矛盾に陥らざるやうに力めねばならぬ。例へば、魚を餌とす書を枕とすを我が文法上よりいへば、魚を書をは客語にして、餌と枕とは補足語、すは述語の動詞である。漢文では、餌魚枕書と書きて、客語と動詞とのみより成る。即ち本來の名詞が、其の意味を兼ねて動詞となつたものである。

左傳に、「門於東閭」戰國策に、「我以宜陽爲餌王」とある門・餌も同じく本來の名詞が其の意を兼ねて、名詞狀動詞となりたるものである。試に茲に簡單なる言語に就きて和漢英の比較を示せば、

足なへ(名動) 蹇蹇(名動形) Cripple, lame (上名動、下形動)

手首(名) 腕首(名) Wrist (名)
 足首(名) 骸(名) Ankle (名)
 足のうら(名) 蹠(名形動) The sole of the foot (名)
 雨降る(文) 雨(名動形) Rain (名動)
 足切る(客語と動) 刖(動・名形) To Cut off the legs (句)
 入墨(名) 黥(名動形) Tattoo (名動)
 首切る(客語と動) 馘(動・名) Excute (名動)
 蟲を餌とす(句) 餌、蟲(讀) Feed on worms (句)
 書を枕にす(句) 枕、書(讀) One slept with a book for one's pillow (文)
 或は邦文の如く或は英語の如く各異同ありて、何れが何れに一致すと遽に定め難く、何れも其の特長を有することを知る。漢字を更に其の文章の上より見るに、文の要素が省略せらるる場合の邦文よりも多きことが、又一特色をなしてゐる。これ即ち漢文が簡潔にして遒勁なると同時に、佶屈聱牙にして難解なる所以である。

第五章 音と訓

漢字が我國に渡來したる最初は、恐らくは吳音を傳へたものであらうと本居宣長はいふ。大江維時の對島貢銀記に、欽明帝の御代百濟王が佛像と經文を獻じた時、對島に支那の尼法明が居て、吳音にて傳へたるが故に、經文は皆吳音を川ふるに至つたと見えてゐる。太宰春臺は百濟音もて傳へられたものであらうといふ。若し然りとすれば、佛敎の隆盛につれてこの音は滅びたものであらう。吳は南方の所謂江左の地で、南北朝時代南朝の都となりし所である。

人文も發達し、我が國との距離も近く、夙に彼我の交通も開けて、我に文物を輸入してゐたのである。然るに推古帝以後、隋唐との往來繁く、北部支那の勢強大にして、文物日に盛なりし時、我が留學生が其の都長安に遊びては、皆北方の音即ち漢音を傳へたものである。總て何事にもあれ、唐の模倣に先を爭ふ當時にありては、學者皆漢音を以て純正の音となすに至り、持統天皇の御代には大學寮に唐の音博士を置きて、漢音の教授獎勵をさへせられた。左に吳漢音讀例を擧げよう。即ち左は吳、右は漢の音である。

一	丁	人	力	七	九	上	下	口	乞	女	工	凡	太	今	元	六	化	尺	文	牛	勿	尼
イ	チ	ジ	リ	シ	ク	セ	カ	コ	キ	ジョ	コ	ン	タイ	ン	ゲン	ラク	カ	キ	ブン	ギウ	フ	ニ
イ	チ	ニ	リ	シ	ク	セ	カ	コ	キ	ジョ	コ	ン	タイ	ン	ゲン	ラク	カ	キ	ブン	ギウ	フ	ニ
生	兄	外	功	令	右	白																
シヤウ	ケイ	グアイ	コウ	レイ	イウ	ハク																
シヤウ	ケイ	グアイ	コウ	レイ	イウ	ハク																

吳漢の音の後に傳へられたるものに唐音がある。

隋唐以來交通益開けて、宋より歸化する僧も多く、随つて彼の變遷したるもの、或は地方的に全く異なる字音を我に傳へて、茲に吳漢兩音と共に雜へ行はるるに至つた。唐の滅亡後も支那を唐と稱したるよりこれを唐音といつたので、實は宋音である。例へば、下火^{フカ}、下棒^{フボウ}、看經^{カンキョウ}、館^{カン}、杏子^{アングス}、拂子^{フシ}、行燈^{アングラ}、行宮^{アング}、胡亂^{コラン}、蒲團^{フツワン}、普請^{フシヨウ}、杜撰^{フゼン}、緞子^{ドゥンシ}、甲板^{カンプン}、孟浪^{マンラウ}、亭^{テイ}などはこれで、我が字音の中で極めて少數である。此の他明清の音と現今の北京音、例へば、上海^{シヤンハイ}、滬^フ、芝罘^{チイフイ}の音など(多くは地名)をも傳へて、字音は頗る復雜になつた。されども吳漢以後の音は、其の數も少く、我が漢文を讀むには、さまで緊要なものではない。

漢字は其の成立が已に象形を根柢としたるもの、即ち表意文字であるから、文字を通じて事物を想起するので、随つて音は文字の後に來るべき第二義的のものである。これが即ち英語などの、音の結合によりて事物を認識し、想起する、言語の音符の記號たる表音文字とは全く異なる點である。由來我が國は言靈の幸ふ國と稱して、専ら言語聲音を先として、事物を想起し識別したものである。然るに漢字渡來後は、其の影響を受けて文字を先にし、我が言語をこれに追隨せしめようとする傾向を生じた。さりながら各事情を異にする國語國音を描寫せんとする上には、幾多の曲折を経過せざるを得ない。即ち音を我に叶へて純然たる和音を生じ、若くは同一文字にして全く内容の異なるものの表現に用ひらるるなど、時と共に漢字は國語化して來た。然り實に我が字音は既に四聲の別なく、傳來當時の原音とも遠ざかり、

全く一種獨特のものとはなつたのである。加之、彼の造字の原則に従ひて、例へば神峠^{カミツツ}、鋒^{トウ}、鏗^{キョウ}、鏗^{キョウ}、耗^{コウ}、樵^{セウ}、袖^{セウ}、辻^{ツジ}、狎^{セツ}、風^{フウ}などの國字も創製せられて、愈漢字は我がものとして今日に發達し來つたものである。これを漢土に就きて見るに、我が傳統的字音の推移よりも、更に更に急劇なるものがある。

國祚の革命と蠻族の侵入、諸國との交通と印度文明の輸入に於て、彼が字音は甚だしく變化して、我に輸入したる古音と全く一致共通を求むべからざるものがあるに至つた。

かくて變化せる彼の音は、再び我に輸入せられて、吳漢以來衆音益混淆して其の辨別に苦むに至れるは前述の如くである。一たび經文が吳音にて傳へられてより今日に至るまで、佛書は猶吳音にて讀み、儒書は漢音にて、其の他は漢吳雜へ讀むのが古來の習慣である。

又我が文字に別に一般的に用ひらるる慣用音なるものがある。吾人は其の何れをも固執することなく、廣く一般的なる音を用ひて時宜に適ふべきである。さて漢字には音と訓とがある。字音を漢語とすれば、字訓は國語である。即ち漢字の意義を我が國語に譯したるものが字訓で、こは數百年の久しき間に自づと定まつたものである。其の中、文字の本來の義を譯したるもの、草^{クサ}・木^キ・鳥^{トリ}・魚^{イサ}・夫^ウ・婦^メ・兒^コ・童^{ドウ}・所以^{ソウイ}、の如きを正訓といひ、其の本義よりも寧ろ意義を取りて譯したるもの、七夕^{セチヤ}・團扇^{ダンセン}・洋燈^{ヤウテイ}・流石^{リウシツ}・如く相似の意義によりて意譯せるものを意訓といふ。又其の字義と全く反對に譯したるものがある。憊亂^{ヘイラン}、亂^{ラン}、離^リ、離^リ、擾^{ヤウ}、擾^{ヤウ}、の如きを反訓といふ。又文字に音と訓との同一なるもの、一字音訓ともに一音なるも

のなどがあつて誤り易い。先に述べたる國字には、勿論音のないことは今更いふまでもない。
 参考 漢文とは漢字にて作れる文の義にして、和文若くは國文に對するもの、漢字は又和字(國字)の對にして、高祖の創業に成る漢の國名よりしてやがては漢は支那の總名となれるが故に、彼の字を稱して漢字と名づけたのである。
 更に支那とは秦の轉化にして、ついには漢土の總名とはなつたのである。

第六章 反切と平仄

反切はまた翻切ともいふ。既知の二字を用ひて、新たなる他の一字の音を説明する方法である。上に在る字を切又は字父、下に來る字を韻又は字母といふ。我が國にては「かへし」と稱して、通常これを五十音圖の行と列とに配合して、其の字音の會合點、即ち歸音を求めたものである。此の法は西域に始つたものであるといひ、或は孫炎といふものが初めて作つたものであるともいふ。兎に角、古にかかる名目の存せざりしことは明かであるが、自然の間に二字の音を合して一字音とすることは行はれてゐたもので、例へば、之乎を諸、何不を盡、之焉を旃とせるが如きは即ちこれである。反切は漢字の正音を知る唯一の標準とせられてゐて、後世の字書には殆ど載せざるものがないのであるから、一應反切の如何なるものなるか位のこと、漢文を學ぶものの當に知るべき必要がある。反切の法

はこれを約言すれば、即ち切字は頭の父音を取り、韻字は下の母音を取つて合するのである。上下二字の父音が同一なる時は、結局下の字の音に歸する。例へば

伏 || 扶腹切 || フク・求 || 巨鳩切 || キウ・ の如きこれである。上下二字の父音が異なる時は、切字の父音を取りて韻字の母音を加へる。例へば

任 || 如林切 || シン・ 分 || 符問切 || ファン・ の如きこれ。上下二字の父音が、五十音の行をも列をも異にする時は、上の父音の行中で下の父音の列に當る音を取り、之に下の母韻を添へる。例へば

刪 || 所姦切 || サン・ は切字の父音シの行中、韻字の父音カの列に當るサを取りて、之にンを加へるが如きをいふ。原則として父位即ち切字は縦に、母位即ち韻字は横に動く。

これを羅馬字にて示せば一見して明瞭である、
 即ち切字の父音と、韻字の母音とが合して歸音となるのである。

失 || 式質切 || シツ Shiki+shitsu = Shitsu

天 || 他前切 || テン Ta+Zen = Ten

酉 || 羊融切 || イウ Yau+Shiu = Yiu

基 || 居之切 || キ Kyo+shi = Ki

烏 || 汪胡切 || ヲウ Wau+ko = Wo. Wau+gu = Wu

右の例に見るに、韻字即ち母位の字の頭の父音を除きたるものに、切字即ち父位の字の頭の父音を加へたるものが、求むる所の新字の音となるを知る。されど往々にして字書に示されたる反切にては、到底所要の音を求むることを得ざる場合がある。こは既に反切の根本たる父位、若くは母位の字音が變化せるが故である。其の今日の音より推して、矛盾せるが如く見ゆるものは、其の變ぜざる時の音に遡りて、之を求めねばならぬ。言語と共に字音も絶えず變遷して、常に吾人の思想生活に順應すべきものたることを記憶すべきである。

平仄ヒヤウシヤウ・平聲・上聲・去聲・入聲ニツシヤウを四聲といひ、支那語發音上の四大區別とする。かくの如き傾向は太古より既に顯かであつたが、後世の所謂四聲の名目は存せなかつたものである。而して詩文の隆盛と悉曇シツタンの學の傳來とによりて、茲に音韻學は長足の進歩を遂げた。齊梁の際、周顒シウゴンは四聲切韻を、沈約シヤクは四聲譜を著して、何れも世に行はれた。隋の世となりては、陸方言が切韻を著して其の韻を分類して二百六韻として、南宋の劉淵は韻略を著して百七韻とし、明の宋濂などの撰した洪武正韻は七十六韻としたが、清の康熙帝の佩文韻府に百六韻としてより以後今日に至るまで一般に百六韻の分類に循つてゐる。これ即ち古今音韻沿革の梗概である。抑、四聲によりて字音を區別することは、世界に殆ど其の類例がない。畢竟漢字漢語が單音であるので、これに抑揚低昂を加へて、其の單調を避け、混同を防ぐために、自然に生じたる現象である。

されば彼の詩三百、何れも其の聲調を譜け、節奏を整へる點に於て、期せずして今日の所謂押韻の法に合するを見る。されど音韻なるものも、亦言語の異動する以上は、一定不變なる能はざるものである。土地と時代とによりて、益錯雜して、彼の國人すらも、猶音韻の分類區別を器械的に暗記せざるべからざるに至る。況んや既に和音となり、四聲の實を失へる我が字音を、彼に倣ひて形式的に分類するも、専門家の外殆ど得る所がないではないか。かの入聲のみはフ・チ・ク・ツ・キの尾音を有するものであると知るも、ウと此のフとの尾音の區別さへ判然せざる邦人に於ては、他の平・上・去の辨別の如きは言はずもなである。されど漢詩に志すものに在りては、必ず此の區別を記憶することを要する。而して多くの字書は大概四聲を記載せるが故に、作詩せんとするには、字書に就きて文字を引く傍、平仄をも併せて見る必要がある。多くの字書には訓義反切の下に正方形を置きて、中に其の屬する韻字を記入し、左上角の圓點を平として、左上角の圓點を上、右上角のものを去、右下角を入としてある。この平を獨立せしめ平字として、他の三と相對し、更に上下に分つ。上去入を併せて仄字といふ。現今の北京音にては、入聲は亡びてないのである。平は平調にして低昂なく、上は語尾が高くして強烈に、去は語尾が軽くして清遠に、入は短促にして尾韻が全く收藏するをいふ。

左に四聲の分類表を掲げ、併せて作詩の一般的なるもの、即ち五七言絶句の形式をも載録して、讀者の便に供する。

入聲	去聲	上聲	下平	上平
葉洽	送宗絳寘未御遇霽泰卦隊震問願翰 諫霰嘯效號箇禡漾敬徑宥沁勘斃陷	薰腫講紙尾語麈齋蟹賄軫阮旱潛 銑篠巧皓哥馬養梗廻有寢感琰賺	先蕭肴豪歌麻陽庚青蒸尤侵覃鹽咸	東冬江支微魚虞齊佳灰真文元寒刪

仄起五言
絕句正格

●は仄字
○は平字
●平仄何れにても可

平起五言
絕句偏格

○韻脚
●孤平

○●孤仄
●●仄三連
○○○平三連

右孤平以下の如きを忌む。

第七章 字數と熟語

創製當時の漢字が極めて少数であつたことは今更喋々するまでもない。人智の發達と世の進歩とに伴れて、少は多に、簡單は複雑に、駸々乎として其の底止する所を知らない。されば文字が時と共に推移し變遷して、益複雑となるは自然の勢にして、古に用ひられしものも、今は全く廢字となり、或は又其の形體を改めて、容易にその古今正俗の別を見出す能はざる古文・正字・略字・俗字となりしも、亦理の當然である。悠久たる上下數百年に互る漢字の數は、今俄に斷言し得ざるも、現存せるものの總數は殆ど八萬に近いとラクベリトはいふ。それに故事熟語・方言・俚語を加ふれば、優に數十萬を算するであらう。これら無數の言語文字も、當時人類の精神生活の顯現として、縦には歴史的に、横には地理的に、時代を背景として必然的に生じたものなれば、必ずや然るべき原則によりて成立し、深き根據を有するものである。かくも言語文字は複雑にして無數に、到底吾人の腦力の堪へ得ざるもの如きも、こは歴史的一般的に見るが爲めのみ。

實際吾人が日常用ふる所の文字の如きは、通常四五千に過ぎない。漢字六千を習得すれば、學者として先づ不足を感じざる程であるとジャイルスはいふ。吾人が日常使用する故事熟語の如きは、恐らく二千を超えないであらう。池田蘆洲の故事熟語辭典には、五萬を集めて稍、網羅に努めてゐる。その努力は推奨すべきであるが、實用上から言へば、隨分無用の勞力を濫用してゐる。今試に字書に就きて、其の字數を見れば、

說文解字（後漢、許慎撰、三〇卷）九千三百五十三

廣雅（魏、張揖撰、一〇卷）一萬八千八百五十

玉篇（梁、顧野王撰、三〇卷）二萬二千七百二十六

字彙（明、梅膺祚撰、一四卷）三萬三千百七十九

康熙字典（清、聖祖勅撰、四二卷）四萬二千七百七十四

などがある、即ち漢字の數は先づ四萬五千内外と見て差支ないのである。試に我が國語の數を検すれば、言海の三萬九千三語より一躍して言泉の二十萬となり、辭林の八萬五千餘より國語大辭典の二十餘萬となれるを見る。この二十餘萬語には、單語の外故事成語諺語などの主なるものがある。これに方言及俗語・學術語・外來語等を加ふるれば、確に五十萬を超えるであらう。然り而して我が多くの國語が、漢字を得て今日に存續せるものなるを思へば、文字の研究は嘗に漢文の爲めのみではないのである。

第八章 字書

漢字典としての說文解字三十卷は、十三經の一となれる爾雅と共に最も古きもので、六書の義を推究して極めて精密なるが故に、文字學を修めんとするものの必ず備ふべきものである。これに索引の不便を避くるが爲に說文通檢がある。玉篇三十卷は古の畫引字書にして、世に廣く行はれたるものなれども、

清の聖祖の勅撰に成る康熙字典の便利にして、文字の網羅・排列及び體裁の間然する所なきには及ぶべくもない。淵鑑類函・駢字類編等の類書は、故事成語の典據を探索するに便にして重寶である。韻字によりて分類編次せる佩文韻府・同拾遺は普く人の藏する所である。これは主として作詩の用に供する目的にてなれるものなるが故に、其の出典の如きも、一々經典に考據せずして、或は漢魏以後の詩句に準據してゐる所があり、又韻の平仄を混入せる箇所もありて、見るものの注意を要する。この外に韻字による排列に經籍箋詁がある。前漢以後の諸儒の經傳注解を分類して編纂したる訓詁學上の集大成である。

漢和字書では、鼈頭音釋康熙字典・字貫・日本大玉篇・明治太廣益會玉篇大全などが一般に用ひられて居た。明治三十六年に出版せられたる三省堂の漢和字典は、嶄然これらの群を抜いて、今日も尙廣く行はれてゐる。字數も多く、解説も詳密、出典も廣く採録せられて、熟語もかなり多い。辨似・國訓・篆文等の附録もあつて、稍完全に、重寶である。但し尾字に因りて熟語を列挙したるは、佩文韻府の典型に由つたものであらうけれども、現代に於ては多少不便である。最近に啓成社出版の大字典が出で名聲噴々として盛に流行してゐる。其の索引に於て、第一字書界の斬新なる方法を見る。扉に部首を掲げて一目瞭然紛らはしきものなく、丁數の他に部首の數もて檢索することを得るなど、確に新記録を作れるものである。最終の音引畫數順列の文字に、更に各字の番號を附したるは、頗る索引に便利である。又説

文大意・同訓異義の辨・類字の説明も簡明で都合がよい。末尾の草書も各歴史的典據的編輯にして學究的眞摯の態度を喜ぶ。更に文字の正略本俗と、姓名の特殊の讀法とを加へたる、又國語及其の熟語をも廣く集成したる、實に我が字書界の權威として、其の編纂の勞を多とするものである。但檢出せんとする文字が各欄外の見出しになきは、聊か物足らぬ心地がする。富山房の詳解漢和字典も亦一般の歡迎する所。索引の法も前者に似て便利に、解説も剴切、熟語も豊富、故事成句も集録せられて、必要なる出典も列舉せられ、頭字による外、尾字による熟語をも載せて、末尾に標準草書を示してある。何れも初學者への懇切を盡したりといふべきである。學生及一般人士の參考として推すに足る。此の他後藤氏のもの、芳賀氏のもの、などもある。以上の字典と全く排列の方法を異にするものに、露人オ・ロゼンベルグの五段排列漢字典がある。漢字を其の構成の要素、即ち字母に分析し、これを基本にして普く文字の排列を試みたるものにして、文字構成の單元を知りて、其の部類に屬する文字の異同を類推するには甚だ便利である。漢字は其の成立に於て、全く英語などとは其の趣を異にするものである。されば諧聲文字の倍・詰・拮・拮・結・黠・髻の如きものすら、音符の吉で引くことを得ずして、各偏・冠・部首によつて引かざるべからざる面倒がある。オ・ロゼンベルグの字典に於ては、其の音符たる吉にて檢出することができさる。

何にせよ五萬の漢字の雜然たるものを、咄嗟の間に見出さんことは、至難の業といふべきである。そは

既に象形的に結合せる要素が、更に複雑なる變化、若くは結合をなせるが故である。されば漢字を扱ふものは、先づ文字構成の方法と、其の構成單位とに關する知識を修むるを要する。世人の多くは、此に注意することなく、不用意に字書に臨み、徒に歎聲を發するもの、自ら修むることの厚からざるを思ふべきである。

勿論二百十四の部首と、二十五の其の變形との暗誦は、困難には相違なけれども、文字の構成法より類推すれば、特殊なるものの外は、さまで努力を須ひずして出來得ることである。

凡そ學は優游涵泳するを要とする。言語文字の基礎的知識を得るに於ては、更に其の切なるを覺える。されば平素文字を檢出するの際、一舉手一投足の勞を惜むことなく、彼此異同を辨じて正確なる知識を修得し、簡單より複雑に及ほしつ、長き間に自然と體得することが肝要である。漢字五千、若くは英語五千を習得すれば、吾人日常百般の事に於て、先づ不自由を覺えずといふ。學ぶに字よりすると、語よりするとの相違こそあれ、齊しく努力の結晶のみ。

漢字漢文を學ぶもの、宜しく自ら強めて不能の語を征服すべきである。近頃音訓線畫引字書が出來て、從來の字書の缺陷を補ふ所あるが如きも、猶檢索の煩雜を除去すること能はずして、吾人の満足を得べくもない。故に前述の何れの字書にても、權威とし信憑するに足るべきものを選びて、常に座右の友として己に慣れしむることが必要である。さて字書に就きて、先づ其の部首の排列を知れば、所要の文字

を得るは易々たるものであるが、中には其の何れの部首に屬するか、初學者の甚だ迷ふものがある。例へば東の木部望の月部脩の肉部執の土部の如き、これである。かかる場合には、其の總畫引表を見るべく、發音を知れる時は音引表によりて檢出すべきである。これらのなき字書にありては、檢字欄にて其の文字の屬する部首を明にすれば足る。

其の我が特稱とを掲げて讀者の參考とする。

イ	人偏	イ	行人偏	イ	立心偏	イ	手偏	イ	獸偏	イ	示偏
禾	ノ木偏	王	玉偏	ネ	衣偏	食	食偏	言	言偏	艸	艸偏
ノ	ノ木偏	疒	病垂	ハ	ワ冠	ハ	ウ冠	竹	竹冠	艸	艸冠
ノ	ノ木偏	シ	三水	受	ル又	彳	コ又	之	之繞	走	走繞
ノ	ノ木偏	口	國構	貝	小貝	頁	大貝	邑	小邑	邑	大邑
ノ	ノ木偏	圭	古鳥	酉	日讀鳥	立	立刀	火	連火	月	肉月
ノ	ノ木偏	欠	吹旁								

これらの部首は皆字典の初めに示してあるし、其の變形も共に載せて明かであるから、細しくは字書に就きて記憶するがよい。前に陳べたるが如き煩瑣なる文字に至つては、一々檢字か其の他の總畫かに據

るより仕方がない。字書を扱ふ前に、必ず部首に通じ置くべきことは、重ねて言ふまでもないが、世間の人は往々これを怠つて、部首の文字を更に他の部首に屬するものとして、例へば香黍を禾にて、鼓を支にて引くが如きことを敢てする。大に注意すべきことである。

第九章 漢文讀法

漢文は其の構成に於て、既に邦文とは大なる相違を有する。故に全然我が文法のみによりて解釋を施さんことは困難ではあるが、然しながら之を和讀し和釋する上には、必ず其の密接不離の關係にある我が國語の應用に待たねばならぬ。太宰春臺は漢文和讀の弊害を列擧しながら、既に和訓せる文字の音韻に拘泥すべからずとなし、文字は大勢の推移に順應して生命を永遠に保有すべきものであることを道破した。其の初め音讀直下したる漢文が、何日の間にか國語の法を取入れて、てにをはを添へ、返點を附するやうになり、準國語として一般の國民に歡迎せられて、遂に大和言葉の婉曲にして姚冶なるものを排斥するやうになつた。所謂女性的の軟文學が男性的の硬文學に壓倒せられたものである。平安城内、太平の夢醒めては、殺氣一時に磅礴して、武骨稜々たる關東武士の治世となり、人心恟々として、復た昔日の觀がない。これ寸鐵よく人の肺腑を刺す漢語の自ら時勢に適し、人情に合し、益、盛に用ひられ來りし所以である。

かくて漢字漢語は元來支那に生じたものであるけれども、實は我が國字國語其のものである。今日の漢語は古の支那原音にあらず、吾人の所謂漢文は現今の支那時文にもあらずして、全く我が言語文學となつたのである。吾人が學ばんとする漢文は、支那の古代文化にして、即ち古文である。其の目的は、主としてこれらの文章を適當なる國語に翻譯し應用して、其の正確なる意義を把握するに在る。されば第一、文の要素を檢出して、其の主語述語の關係を知り、更に補語客語、其の他の修飾語を解剖して、文の前後の關係を明にし、正確なる解釋を下すに至りて、目的は達せられたりといふべきである。此の意味に於て、吾人は常に白文の解釋を以て本體とすべく、返點送假名附のものは、漢文を知らざるもの手引として止むを得ざるに出づるものとす。そは句讀返點送假名にのみ頼りて、漢文組織の根柢に觸るることなく、何等自ら發明し體得し歸納することがないからである。文の構造を吟味して其の讀法意義を知らば、返點送假名を附する位は容易なる問題である。要するに漢文の訓讀は即ち其の譯讀にして、讀み得るものは又同時に解し得べく、唯特殊なる場合を除きては、讀み得て解し得ざるが如きことはあるべからざるものである。

故に讀法は簡明にして、而も國語に一致して解釋し易きを上乗とする。されば殊更に奇を銜ふが如き訓讀と、甚だしく文意と背馳するが如き直讀とを避けねばならぬ。國語的といふも餘りに冗漫なるものは捨つべく、國文法になしと雖も、簡勁にして文意に副ふものは用ふべく、漢文の組織と本來の意義とに

鑑み、我が國語との近似を求むればよいのである。先人の讀法の如きは、其の甚しき矛盾を生ぜざる限りは、これを踏襲して可なるもの、但し盲目的にして思はざる誤謬を招くやうなことがあつてはならぬ。左に少しく文章解釋上の要諦を掲げて讀者が參考の資とする。

(一) 文字熟語を正確に記憶すること

文字若くは單語の智識に乏しくしては、固より文章の明確なる觀念を得べからざるはいふまでもない。廣きに互りて曖昧ならんよりは、寧ろ狭くとも確實なる智識を要する。知識が正確なれば隨つて其の中心として、觀念は廣く聯合し、其の深さと共に廣さをも増すものである。確實性なるものは既に知識に孤立的貧弱を許容しない。高山の裾野の廣きが如く自ら確實なる知識の群は擴充せられる。例へば「戊」を正確に記憶せんが爲めには、類字の異同に通曉せざるべからざるが故に、「戊・戌・戍」は期せずして腦裡に印象せられる。凡そ言語文字を消化して自己の營養となさんには、只其の一面のみを見るに止まらず、表より裏よりし、右よりし左よりして、其の字其の語の性質を究むることが肝要である。中庸の所謂博學審問慎思明辨篤行を以てすれば、凡百の事業何の達得し難きものがある。されどそは最初よりして望むべきにあらず。但學に志すものは居常かくの如き心掛を要すといふのみ。要は世に普通に於て基本的なる知識より修めて、漸を追ふて明確に該博に、自己の知識的體系を構成せんことを努むればよいのである。かくて文字言語の基礎的知識に缺くる所がなければ、餘は其の連合上の法則、若くは慣

習を知るに於て、幾多の複雑なる文章も、刃を迎へて解くるが如く易々たるものである。

(二) 文の要素を明かに解剖して主眼を捉ふること

漠然文章を冒頭より解釋せんとして、一語の躓くものあれば、爲めに全體を餘儀なく瓦解せしめて、遂には不能に終るの憾を抱くことは一二にして止まらない。これ即ち盲目的解釋の通弊にして、全く文の構造に注意せず、其の眼目を捕へ得ず、單に文字の末に拘泥せるが故である。

されば先づ其の文の主眼は何なるか、それに就きて叙述せられたる主語を見出し、これを中心として更に其の主題は何を物語れるか、其の述語を求めて、主語述語の關係を明にせねばならぬ。即ち何が若くは何は何を、何に何したるかとの關係に於て、主語述語客語補足語の四要素を明かに區別して考へる時は、一文章中の文字は悉く此の何れかの要素の集團に分別せらるるものなるを知る。しかして文中主語述語の關係は、他の要素よりも更に重要にして、この何れを失ふも文章は成立せざるものなることを悟る。かくて全文が各要素に分解せられ、其の各の關係が明瞭になれば、文章の意義は釋然として自得せられる。かの修飾語の如きは、各其の制限を受くる文の要素に隸屬すべきものである。文に重文複文混文等の別を設くるも、畢竟文の解釋を易からしめんが爲のみ。さればこれらも、必ず主語述語によりて成立する文の單位に解剖して、然る後に適當なる解釋を下すべきである。漫然として其の要點を掴むことなく、無秩序に出鱈目に支離滅裂の解釋をなすは、此に思を致さざるに因る。後の文法篇に於てこれら

一般の法則を習得して、實際の解釋上に應用せられんことを望む。

(三) 文字の位置を明かにすること

尙の解釋に單語、即ち文字の明確なる觀念を必要とすることは、今更言ふまでもないが、其の文字の性質を十分に知らんとすれば、常に一個の文字としてのみならず、他の文字との結合、若くは連絡上の法則をも究めねばならぬ。換言すれば、如何なる性質の語なるかを知らんと共に、如何なる文章上の位置を占むるかも同時に研究するを要する。詩經商頌に「奄有九有」とある「有」は、上の場合は動詞にして保有する義、下のものは有する所のもの即ち九州の名詞となれるものである。また「十有九日」「有夏」の如きは助字にして、これと同じ形にして接續詞「又」に用ひられる場合もある。「有す有つ」の時は他動詞となりて、客語の上に位することは他の動詞と同一である。以上述べたるが如く、文章を解剖して其の構造を知るには、必ずその單語なる文字の性質と其の位置とを考察するを要する。若し文字の性質を知らず、其の位置に不注意なる時は、到底文の構造を知ることが出来ないし、正確なる解釋を下すことは勿論困難である。當推量にて時に僥倖を得ることがあるも、斯くの如きは元より恃むに足らず、其の根本的知識に於て既に缺如する所があるではないか。

(四) 文の省略を補ふこと

漢文は國文よりも、より以上に文の要素を省略する。主述補客何れも屢々省略せられて、如何なる語を補ふべきかすら曖昧になり、随つて意義の不明瞭多岐に互る恐がある。故に熟讀吟味して、上下全文の意義にびつたりと副ふ所の適當なる要素を補はねばならぬ。吾人漢文の解釋に志すものは、此の省略せられたる要素を補ひて遺漏なきを期すべきである。これに比すれば英語の如きは、文章の形式が略々完全で、最初から主語述語其の他の要素を省略するが如きことはない、後文の省略は只其の重複を避くるが爲なれば、意義の多岐に流るる憂なく、直に前文より採り來つて補ふことも出来る。然し漢文の省略とても、何の理由もなく無闇と行はるるものではない。必ずや其の由つて來る所がある。故に反復熟讀して其の補ふべき適當なる要素を見誤らざるやう努めねばならぬ。

(五) 品詞の轉用に注意すること

文の要素を知る前に、先ず文字個々の性質と其の文章上の位置とを知らねばならぬことは既に述べた。然り實に文字の使用は多様にして、單に其の一面のみを知りて他を知ることなくば、全く應用は不可能である。左傳に「門於東閭」とある「門」は本來名詞なれども、此處には動詞に轉用せられてゐるのである。孟子の「長幼卑尊皆非薛居州也」とある「薛居州」も、本來の固有名詞が、此所にては普通名詞善人の意に用ひられてゐるのである。又左傳に「爾欲吳王我乎」とある「吳王」も、固有名詞であるのを動詞に轉用したものである。かくの如く漢文にては、文字の形は依然として舊のままにして、而も品詞は

全く他のものに轉化せるものが多い。ただ其の位置によりて、又上下の關係によりて其の轉化を知り得る。例へば「回也聞一以知十、賜也聞一以知二」老吾老以及人之老、幼吾幼以及人之幼の「以」は接續詞にして、「彼以其富我以吾仁、彼以其爵我以吾義」の「以」は前置詞より一轉して動詞となれるもの。「古人秉燭夜遊有以也」「良有以也」の「以」は名詞にして故と同じである。此の他副詞「已」と通じて、甚既と讀み、又以爲と同じく思惟と同様に讀む。而も形に於て少しも異なる所がないので、文字の位置と品詞の轉用とに注意せざれば、思はぬ誤謬に陥ることを免れない。然しながら、これらの文字を個々別々の場合に應じて、確實に記憶せんことは到底吾人のなし能はざる所にして、又如何なる強記の人と雖も、其の徒勞に屬するを免れない。故に後に述ぶる所の文法及用字に就きて、其の變化の根柢たる一定の法則を會得し、實際の解釋に當つて應用すればよいのである。詩經書經の如き古文中の古文に在りては、文字の特殊なる用法も多く、これをしも網羅し記憶するは稍困難なることであるが、吾人の日常觸るる所の漢文の如きは、自ら一法則の支配するありて、法外なるものは殆どない。變化は表面のみより見る時は、到底單純なる原理に歸納し、還元し、統一し得ざるもの如きも、言語文字の變遷は決して一足飛に無秩序に行はるるものにあらずして、其の變ぜざるべからざる原因によりて、當然變ずべき方向に流動し來つたものである。其の變化の一面より見れば、常に移動し複雑化するが如くなれども、これと同時に又常に統一せられ單純化せられて、整然たる體系を存するものである。

吾人がこゝに力説する所以は、個々の知識を孤立せしむることなく、これを他と比較し聯合して、更にそれが一般的不變の原則を歸納し、自己の知的體系を形成することの、何よりも先づ重要な故である。自己の根本的基礎的知識を培養せば、些々たる枝葉の問題は其の旭光の前に淡き姿を銷すであらう。世の徒に僥倖を冀ふものの如きは、眼前の鹿を追うに急にして、背後の大山絶壑を見ざるもの、終生の試驗を如何せむとするか。

(六) 反復熟讀すること

よく其の文章の全體を通讀し、幾度も反復して全文の意義を辿り、文の構造及文字の位置を明かに察して、矛盾を生じたり早計に陥つたりしてはならぬ。かくて此の文の主語・述語・客語・補語の各要素を判然識別して大意を得れば、即ち大半解釋は出來たものである。繰返して讀誦する中には、自然と漢文の特色なる對句を捉へることもできれば、省略せられたる文の要素を補ふこともできる。「善不積不足以成名、惡不積不足以滅身」の文に於ても、善惡其の他の文字の皆對法に成れるを知れば、解釋は極めて簡單である。「回也視予猶父也、予不得視猶子也」に於て、視の下に回の省略せられてゐることは、再讀の後には直に明かに了解せられる。難解の文に當りても、反復考慮することによりて、品詞と其の轉用とを知り、用字の異同に氣付きて、釋然何の困難をも感ぜずして、溜飲を嚥下するの快を覺えることは多い。「増始勸項梁立義帝、諸侯以此服從、中道而弑之非増之意也」の文中、増が人名即ち固有名詞なることは、通

讀の際思ひ浮ぶべく、然らざれば再三讀誦を試むるに於て然るを知る。かくて一語の滯滞するものなれば、立に解釋は施される。讀書百遍而義自通とは此の間の消息を傳へたるものか。讀者は深く思を致して、一部分の蹉跌に失意することなく、廣く既習の知識を察し、文法を應用して、文の要素を分割し、他の明なる部分より推量し熟考して、全文を釋き得て遺憾なからんことを期すべきである。

第十章 句讀、返點、及送假名法

(一)句讀 句とはまとまりたる一文章の謂で、我が文、英語のセンテンスである。此の符號を句點又は「キリ」と云ひ、字の右脚に○を置く。

讀とは語の集りて一段落をなせども、主語述語の一を缺き、完全なる文章の體を有せざるもの稱にして、假に主述の形式を備ふるも、全く獨立を失ひて、他の文章の一部分に過ぎざるものである。我が句、英語のクローズにして、符號、を字の右脚に附する。を讀點又は「ヨミ」と稱して、上下語意の相離るる所、又は長文の接續せる部分に附ける。古來此の兩者を混用し、雜然として句と讀とを識別し難からしめ、或は徒に文章を寸斷して、却つて文意を誤るが如きものあるに至る。尤も句讀の法は、必ずしも萬人一様なるを要せず、人によりて長短如何様にも扱ひ得るものなれど、大體より見て、文の段落接續に關する明かなる文章法上の智識を有せざる時は、其の文章の完全なる解釋は到底爲す能はざるもの

である。句讀を知らば解し易く、解釋を知らば句讀は自ら瞭然たるもの、支那人が始め師に就きて句讀の法を誦習するといふは、道理あることである。句讀と解釋とは離すべからざる關係にあることは嗚々を要しない。そこで句讀を施すには、先づ解釋を試みて後になすべく、解釋をなさんには、先づ句讀を終へて後にすべきで、兩々相俟つてこそ完全に釋明することを得るのである。故に句讀を施す際は、必ず讀誦一番文の意義を明かにして、然る後にせざれば甚しき誤謬を來す恐がある。靜かに其の文を讀誦して、全文の意義を追うて自ら思を馳する時、文と我と相和して、抑揚起伏の波瀾、「一呼一吸の格調、脈々として我に逼るものがある。即ち文の曲折緩急斷續の調子は、自然と我が胸裡に躍動し來るのである。かくてこそ完全に解釋し得べく、且つ適切なる句讀を施して誤らざるものといふべきである。

今二三文中に挿入する符號につきて簡單に説明する。他より引用したる語句文章には、右肩と左脚とは「」を附する。これ即ち引用符にして、世に劈畫といふ。文章の段落を示すには「」を字の左脚に附する。これを勾畫といふ。本文の下に括弧()を附して注釋文を挿むの符號とする。行頭には大圈○を附ける。また文の主眼たるべき文字の右側に重圈◎を附ける。これを字眼といふ。其の他語句の右傍に附する——を單柱、——を雙柱といふ。

吾人が日常に最も必要なるものは、殆ど句讀點のみといつてもよい。しかして若し文の句讀を切るに當つて、句點讀點の混用が紛はしく、却つて疑惑を生ずる恐ある時は、文の切目切目に句點若くは讀點を

施して、全篇を何れかも一貫して差支ないのである。

(一)返點 一字の返には「譽我者不足喜」の如く左肩に「レ」を附する。二字以上の長短に關はらず順に上に返るものには、「祿位高乎人者、可_レ以_レ耀一時、而不_レ足以傳百世」の如く左脚に順に一二三四を附ける。文章が複雑になりて、二字以上返を含みて更に上下するもの例へば「使_レ富貴而事功昭乎時、福澤加乎民、君子固有_レ取焉」の如きは、上_レ中_レ下_レ又は上下を左脚に附ける。更に複雑にして上_レ中_レ下_レにて不足なる時は、甲_レ乙_レ丙_レ丁_レ戊_レを用ひ、更に又其の足らざる時は天地人を用ふ。「然安知_レ夫_レ縱_レ之去也、不_レ意_レ其_レ必_レ來_レ以_レ冀_レ免_レ、所_レ以_レ縱_レ之乎」の如き、即ち是である。また二字三字の連字の返には、「魯人爲_レ人_レ臣_レ妾_レ於_レ諸_レ侯_レ」先_レ後_レ生_レ於_レ吾_レ也」の如く、字間に縦線を引きて其の連字なるを示す、連字が互に相次ぎて上の返を承くる時は、「齊冠_レ帶_レ衣_レ履_レ天下_レ」の如く一二の返の間、二より順に三四を附ける。下の返を承けたる字が更に語を隔てて返る時は、二個の記號を重ねレ點を下に置く。「勇_レ於_レ爲_レ人_レ」不_レ待_レ其_レ戲_レ而_レ賀_レ以_レ成_レ之_レ也」之と反對に上の返字が更に一字返る時は、決して符號を重ねないで、必ず別に上にレ點を附けねばならぬ。「唯友悌深至、不_レ爲_レ傍_レ人所_レ移_レ者_レ免_レ夫_レ」の如くである。

(二)送假名 上下に返つて讀む以上は、國文法に従ひ動詞の時や、主格目的格的助詞やを正しくすることを要する。然しながら解釋上に誤謬を來す恐なく、既に永き間の慣用となれるもの、例へば國語の過去現在未來を漢文にて殆ど現在に讀むが如きは、さまで批難すべきものではない。寧ろ國語の冗長に失せんよりは、先人の簡潔なる讀法に従ふを可とする場合が多い。特に國語との一致を求むるは、訓讀と解釋と相補ふて常に背反することなからしめんが爲めである。されば漢文の讀法は、其の特長たる簡潔と遒勁との格調を失はざる範圍に於て、國文法を顧みつつ、なるべく近似の點を求めて、文の意義を最も明瞭に切實に表現し得るものたることを要する。

- (一)動詞形容詞等は、その語尾變化を書きあらはす。例 苦_レ少_レ起_レ立_レ苦_レ闘。
- (二)語尾に含まるる助動詞助詞接尾語は皆これを書き見はす。例 友善_レ欲_レ學_レ劍_レ日暖_レ。
- (三)漢字を音讀する時は、其の他を書き見はす。例 老_レ老_レ賢_レ賢_レ不_レ恕_レ。
- (四)活用語の音便によりて轉じたるもの、又は延音となれるものは、語尾の部分より假名を送る。例 思_レ而_レ不_レ得_レ悲_レ哉_レ願_レ奉_レ教_レ恐_レ言_レ。
- (五)除外例 經傳等一音の動詞の中止形、經傳には勿論假名を送らず。「也」の字のある時も大抵語尾の末なる「ナリ」を用ひず。候が國文に用ひらるる時も亦終止連體兩形とも假名を送らぬ。非には「ラ」を、日は「ハ」を送らず。例 非_レ日_レ。
- (六)品詞が轉化して活用の變ぜるものは、元の形に變化したる部分を添へる。或動詞が他の動詞に轉ぜるもの。例 驚_レ驚_レ食_レ行_レ塞_レ語_レ。

動詞が形容詞となりたるもの。例 歎^{カハシキ}事^{コト}。喜^{ウレシ}疑^{ウタガハシ}忌^{イハシ}駭^{オドロシ}。
 形容詞が動詞となりたるもの。例 悲^{カミヤミ}樂^{ウレシ}辱^{ウチヲス}全^{ウケス}怪^{オドロシ}。
 副詞・前置詞が動詞となりたるもの。例 再^{ヒトトシテ}以^{ヨリ}爲^ス於^ニ與^ニ。
 副詞が形容詞となりたるもの。例 未^{マダ}甚^シ。
 副詞が形容詞動詞となりたるもの。例 專^{クニナリ}頻^{リナリ}盛^{リナリ}。

○但し活用形を異にして、全然混同の恐なきものは、其の語尾のみを送る。例 起^ク。起^ク。聞^ク。聞^ク。見^ル。見^ル。嗜^ム。戒^ム。(嗜タシナ戒イマシの獨立語はない。苦クルシ樂タノシは獨立して存するが故に、苦^ム樂^ムと「シ」を送る)

(七)形容動詞若くは形容詞、或は數詞には「ナリ」「タリ」「アリ」の語尾を附する。例 異^{ナリ}。詳^{ナリ}。洋々^{ナリ}。洌々^{ナリ}。巍然^{ナリ}。善^{ナリ}。惡^{ナリ}。詩三百。

(八)活用連語は其の各に語尾を送るものとするも、讀みかふる必要なく、誤謬を來す恐なければ、上部の送假名を廢する。例 折曲^レ。折曲^レ。流出^ル。流出^ル。差遣^ル。打取^ル。

(九)副詞の二音のものには左の五語の外送らず、三音のものには一音を送假名とし、四音以上のものは一音又は二音三音を送る。

二音のもの。例 若^シ。縱^ニ。能^ク。克^ク。斯^ク。モシ。ヨシ。ヨク。カク。

三音以上。例 併^シ。殆^ド。必^ズ。但^シ。尤^モ。聊^カ。爭^フ。自^ラ。雖^モ。靜^{カニ}。明^{カニ}。安^{カニ}。鮮^ニ。固^{シク}。等^{シク}。果^{シテ}。動詞形容詞の副詞となつたものには、活用語尾より送る。例 極^メ。總^テ。因^リ。及^ビ。敢^ヘ。委^{シク}。餘^リ。案^ニ。但し於^テ。渾^ニ。況^フ。雖^モ。豫^メ。等は根源を尋ねれば動詞等の活用語より來るものなれども、今全く活用語として用ひられざるものなれば、普通の副詞と見るべきものである。

(一〇)除外例 各^ノ。愈^ニ。偶^ニ。會^フ。抑^テ。交^フ。等は誤讀の恐ある時右下に「」を附するも送假名を附けぬ。加之。遮莫^ク。流石^ク。就中^ニ。假令^シ。生憎^ク。等の熟語を訓讀したる時も假名を送らぬ。

(一一)副詞・接續詞等の語尾に助詞・接尾語あるものは、副詞等に送るべき部分に添へる。例 爭^フ。何爲^シ。必^ズ。聊^カ。併^シ。見^ル。

(一二)名詞・代名詞等の體言には假名を送らず。但し他の活用語などの轉化したるものには間、假名を送る。例 思^フ。習^フ。謂^フ。赤^ク。宿^リ。甘^ク。重^ク。憎^ム。樂^ム。但し悲^シ。樂^シ。親^シ。苦^シ。惜^シには「ミ」を附けず。

動詞自他の區別を必要とする時を送る。例 渡^ル。渡^ル。預^ル。預^ル。殘^ル。殘^ル。數詞一^ツ。二^ツ。三^ツと讀む時は特に「ツ」を送る。そして一^ツ。二^ツなどの時は「タビ」を送る。即ちこは副詞である。

(一三)凡そ單語たる漢字が、概念的に一部分を表はせるが如く見ゆる時は、其の他を送假名として附する。例 棹^ヲ。指^シ。畫^ク。春^ノ。薄^ク。安^ク。靜^ク。連^ル。横^ニ。素^ク。

(四)受身の動詞と呼掛の「也」及び「者」又「與」には全部假名を附ける。例 爲_ル人殺_ニ。不_レ見_ル信_ニ。爲_ル人_ニ所_レ治_ル。治_ル於_ニ人_ニ。由_ル也_ニ果_ル。德_者本_也。財_者末_也。禮_與其_奢也_寧儉_也。但し從_レ自_レ由_ルの場合には最後の「音を送る。例 登_ル高_必自_卑。由_ル堯_舜至_ニ於_湯武_ニ。五百有餘歲。

(五)名詞・代名詞に添ふる助詞接尾語、又は活用語に添ふる語は送假名の形として附する。例 柳_ハ綠_ニ花_ニ紅_ニ。有_ニ范_ニ睢_ニ者_ニ。豈_信之_ニ。任_重。道_遠。屢_斥。家_給人_足。

(六)動詞の時を表はすには、我が文法に於ける「ツ・ヌ・タリ・リ」「キ・ケリ」「ン・ケン」「タリキ」等を用ひる。例 既_ニ往_ニ矣_ニ。雨_降。平_定。沈_ニ於_海。吾_往矣_ニ。花_開。爲_レ女_服命_ニ。至_既死_矣。

長文に在りては最後の句の外省略することが多い。現在は動詞の語尾、終止形で表はす。

(七)敬語は特に我が皇室に關して用ふるものにして、活用語の下に附けて送假名とする。例 太子_加冠_ニ。臨_ニ幸_ニ。大_久保_卿之_第。ル_ルル_ルス_・サ_ス・シ_ム・タ_マフ_・マ_ツル_・タ_マツ_ル」等の語尾を附する。敬語の重出の時は、省きて最後に置くことがある。

(八)將_未宜_當猶_等の字は初讀のもの右傍に、再讀の假名を左傍に附ける。例 日_將暮_ニ。宜_當鑑_ニ于_般。文_猶質_也。質_猶文_也。當_ニ拊_舞受_ニ之_ニ。吾_未見_ニ如_レ斯_人也_ニ。

但し使_教遣_令俾_は再_讀するも最初の符號を施さず、且つ送假名も後のもののみを右下に記す。「シテシム」の「シテ」は目的語の下に送りて「人_{シテ}」の如く書く。

第十一章 漢籍解題一斑

食は肉體を養ひ、書は精神を培ふ。故に攝取する所の食物は必ず營養となり、繙讀する所の書物は必ず知識となる。さはれ食品の種類や多く、書籍の數や汗牛充棟も曾ならぬ。吾人は其の如何なるものが、如何なる價値を有するかを知るに苦む。殊に書物は食物の如く萬人共通ならず、内容も亦複雑にして、進歩もより迅速なれば、單に先人の經驗を辿り、若くは他人に模倣するのみにては満足し得ざるものである。されど一人にして有らゆる書物を讀破することは、到底不可能の事に屬す。又それ程多くの書物を讀みたりとて、必ずしも知識の完全、乃至確實を保證し得るものでもない。兎に角人は絶えず知識を欲求し、眞理を追窮して止まないものである。この求知慾を満足せしめ、正確なる自己の知識を得るには、其の研究の方法が統一的に宜しきを得ねばならぬ。されば一定の目的なくして多讀するは、何の得る所もないものである。

故に吾人は先づ第一に其の目的を定むることを要する。然る後に其の書籍の選擇をする。選擇せんとすれば、勢多くの書物に就きて其の内容を知る必要を生ずる。吾人が學習の難易は、一に此の良書を得ると否とに因るといふも過言ではない。これ即ち茲に幾分の頁を割きて、主要なる漢籍を列舉し略説を加へたる所以である。

讀者若しこれによりて須要なる漢籍の概略に通じ、他日専門に入るの端緒とせらるるものあらば幸甚である。今や歐米に於ける漢籍研究の盛なるは實に驚くべきものがある。この時にあたつて、我が國に漢籍の出版せらるるもの年と共に其の数を増し、主要なるものを網羅せる一大叢書の刊行も亦陸續相踵いで世に公にせらるるは、實に喜ばしいことである。興文社の漢文講義（四六版）同社の少年叢書漢文學講義は例れも安價で便利である。早稻田大學出版部の漢籍國字解は、先哲の遺著を集輯したるものにして名聲が世に高い。富山房の漢文大系も亦斯界に珍重せられてゐる。最近有朋堂からも漢籍和譯叢書が出版せられたし、國民文庫刊行會からも國譯漢文大成が出てゐる。さて愈順次漢籍の解説を試みよう。

(一)易 易經又は周易ともいひて、五經の一、十三經の一に加へられてゐる。其の基礎たる八卦は伏羲の創造に係る。周の文王に至りて八卦を重ねて六十四とし、各卦の説明たる象辭を作り、周公は更に六十四卦を疊みて三百六十四爻とし、各爻の象を説明した。孔子に及び、象辭の注釋を施して象傳象傳繫辭文言說卦等の十種を著す。これが即ち十翼で、反對の議論もあれど、先づ易はこゝに至りて完成せられたるものであるといふのが一般の信する所である。

これを周易といふは、文王・周公の解説あるにより、且つ太古の占易なる夏の連山と殷の歸藏とに區別しての名である。易は宇宙萬有の根元を、陰陽二元の消長によりて思辨する純然たる哲學にして、偶々人事百般の占筮に應用せられて今日に及んだのである。天地の始原は、未だ渾沌として分れざる一物にして、太極と名づける。太極より陰陽二元を生じ、更に四象となり八卦となる。八卦即ち天地水雷火風山澤は、宇宙一切現象の根本にして、萬象は此の八者が互に相動きて成立するものであるとする。乃ち知る、易は宇宙の現象を歸納して一大法則を確立し、以て吾人人生の上に應用を試みたものであることを。十三經古注には、魏の王弼と晋の韓康伯との古注に、唐の孔穎達の正義を合せたるものを列してゐる。宋に至りては、司馬光の易說、程子の易傳、朱子の本義などが出た。程子の傳は最も要を得て易の本旨に叶ふ。朱子の専ら卜筮の書として説いたものである。清の胡渭の易圖明辨があつて、考證該博、識見卓越、初學者に益する所が多い。

(二)書 書經といひ、又尙書ともいふ。五經の一、十三經の一に列する。首として堯舜禹の政道を記録し、又周の事蹟を載す。古は尙書と呼びしを、後世は専ら書經と稱するに至つた。尙とは尊びてとも、上代なるが故にともいふ。書經は即ち三代右史の筆に成りしものにして、積みて周の世に至りしに、孔子がこれを刪定して百篇となしたるものであるといふ。秦火に遭ひて散佚し、漢の世に及びて、秦の博士伏勝が、晁錯に傳授したるもの二十八篇、これを當時の隸體に改寫したるものと呼んで今文尙書といふ。景帝の末に孔子の舊宅を壊ちて、尙書禮記論語孝經等を得て、孔子の後裔孔安國が、隸書に改めて武帝に奉る。これ即ち古文尙書にして、篇を増すこと二十五、今傳はるものは、古文今文併せて五十八篇ある。五經に列するものは宋の蔡沈の注、書經集傳六卷で、十三經に列するは、漢の孔安國傳、

唐の孔穎達の疏なる尙書正義二十卷である。宋の朱子は古文尙書を僞作とし、元の吳澄も亦古文を刊りて取らず、清の閻若璩古文疏證を著してこれを斥け、今日に及んでは全く古文を信するものなきに至つた。周の世に數百千の書ありしを、孔子刪りて纔にこれを傳ふといふも、亦信じ難い、しかして十三經に列せる孔安國の傳も、全くの僞作であることが明かとなつた。書の典謨訓誥誓命を六體といひ、征貢歌範を加へて十例と呼ぶ。

(三)詩 詩經ともいひ、五經の一、十三經の一に列する。凡そ三百五篇、孔子の刪定に係る。商頌五篇の外は殆ど周人の作で、古のものは泯滅して傳ふるに由がない。周の世、天子五歳に一度巡狩し、采詩の官を置いて、地方の歌謠を探り、これを音律に合して諷誦せしめ、政治に資し教化を助けた。また朝廷に於ける五禮即ち吉凶軍賓嘉には、大師に命じて詩を作らしむることなどありて、殷周二代のもの凡そ三千餘篇あつたといふ。獨り秦火に亡びざりしは、其の人々吟誦して傳へしに由る。地方の歌謠を探りて國風といひ、周南召南衛鄭の如きはこれ。政に關する褒貶をいふを雅といひ、大雅小雅の別がある。盛徳を形容し、成功を神明に告ぐるものを頌といひ、宗廟祭祀に用ふる一種の讚美歌である。形式上詩の組織を分ちて三とする。他物を假りて其の意義を表出する法を比といひ、今日の所謂直喻である。見聞する所を直寫鋪叙するを賦といひ、敷衍の義である。物によりて思想を陳ぶる誘引とするものを興といひ、隱喻に屬する。風雅頌比賦興を詩の六義といふ。

これらは殆ど皆敘情詩にして、純然たる敘事詩なしといふも可である。戰國の時の魯人毛亨前漢の趙人毛萇があつて、大毛小毛と呼び、毛傳を作る、今はこの毛詩のみが世に行はれてゐる。十三經に列するものは、毛公の注、鄭玄の箋、即ち毛詩鄭箋で、疏は孔穎達の正義である。前漢の頃齊詩(轅固)魯詩(申公)韓詩(韓嬰)毛詩(毛萇)四家の詩を専門とする學者があつた。これを四詩と稱してゐたが、三家は已に亡び、毛詩のみ現存する。

(四)春秋 は本と魯の國史にして、孔子の筆削に成る。

春秋とは一年を代表するの名にして、當時其の國の記録を春秋と稱せしものは獨り魯のみでない、しかし孔子の筆削以後、殆ど魯の専有の名稱のやうになつた。蓋し周室衰微して、戰國の世となり、禮樂頹れ刑政亂れて、王室の威令は復た天下に行はれず、到る處に強食弱肉の悲劇を演じてゐた。此に於て孔子は大に慨歎して、王政復古を唱へんとするも、其位に在らざれば、せめて魯の記録によりて、隱公十一年より哀公十四年まで、十二代二百四十二年間の事跡に就き、善惡を辨じ、大義名分を明にし、これによりて尊王の道を知らしめたのである。五經の一、十三經の一に列する。公羊穀梁左氏の三傳があつて何れも十三經に加へられてゐる。

左氏は事實に重を措き、公羊・穀梁は削筆の義理を多く論ずる。左傳は周末左丘明の叙ぶるもの、晋の杜預の注、唐の孔穎達の正義がある。公羊傳は周末公羊高の述ぶる所で、漢の何休の注、唐の徐彥の疏

がある。穀梁傳は周末の穀梁赤の述ぶる所、晋の范甯の注、唐の楊士勛の疏がある。

(五)周禮 周官ともいひ、周の官制職掌を細記したもの、世に周公の作といふ。蓋し周公の理想であつて、未だ實行せられなかつたものを、周末に傳述せしものであらう。天地四時に象りて、天地春夏秋冬の六官を置き、天官を冢宰(總理)とし、地官を大司徒として農商教育司法のことに任じ、春官を大宗伯として、祭祀式典を掌らしめ、夏官は大司馬にて兵馬の權を委ね、秋官は大司寇にて、刑罰のことに司らしめ、冬官は土木工事を掌らしめる。實に古今政道の大本を示したる政書といふべきである。こは漢の武帝の時始めて出で、成帝の時劉歆によりて世に紹介せられ、鄭玄これが注を作つて、茲に完成せられたものである。漢の鄭玄の注、唐の賈公彦の疏、所謂周禮注疏四十二卷は、儀禮、禮記と共に十三經に列せられてゐる。清の孫詒讓の周禮正義があつて、参考とするに足る。

(六)儀禮 坐作進退の禮儀を記したる書にして、周公の作といへども、恐らくは一人の作に非ずして、古來傳習される禮節を、先秦の頃に至りて、集録したるものであらう。漢書藝文志に古禮經とあるを見れば、古は此の名あらざりしを知る。また士の禮を誌せるより一に士禮ともいふ。冠婚喪祭朝覲聘問の禮を記すこと頗る具である。漢の初魯人高堂生が禮十七篇を傳へて、これを今文といひ、景帝の時、魯の恭王が孔子の舊宅を毀ちて得たものを古文といふ。五十六篇の古文は全く散佚したりといひ、或は今文と略同數であるともいふ。十三經に列するものは、鄭玄の注、賈公彦の疏である。鄭玄は三禮に通

じてゐるが、就中儀禮を最とし、後世及ぶものなしといはれてゐる。元の敖繼公の儀禮集說、清の吳廷華の儀禮章句は、初學の爲めに懇切である。

清の凌廷堪の讀經釋例がある。また程孫田の喪服足徵記は鄭玄の惑を解けるもので、参考に資すべきである。

(七)禮記 古人の禮節に關する遺言を集めたるものにして、孔子の門人及び後世の學者の記述に成り、秦漢の初に輯録せられたるものといふ。

秦火に遭うて一度滅び、漢の時戴德が雜然たる煩重を刪定し、合せて八十五篇とし、これを大戴禮といひ、甥の戴聖は更に之を刪りて四十六篇となし、これを小戴禮といつた、漢末に馬融が小戴の學を傳へ、増して四十九篇とした。

今の禮記は四十九篇にして、こは戴聖の原書なりと傳ふ。他の殘餘を集めて特に大戴禮といふ、即ち三十六篇にして、清の孔廣森の補注がある。禮記の中最も愛誦すべきは、檀弓大學中庸の諸篇で、大學中庸は後世別冊として、論孟と合せて四書と稱するに至つた。十三經に列するものは、漢の鄭玄の注、唐の孔穎達の疏六十三卷で、五經に加へたるは、元の陳澧の注にして、禮記集說十卷が即ちこれである。

五經 以上の詩書易禮春秋を併せて五經といふ。漢の武帝が五經博士を置くに始り、班固が白虎通を著

して、截然五經の目をたてたるに廣まる。
六經 五經に樂經を加へて六經といふも、樂經は秦火に滅びて、たゞ名のみ存してゐる。この名を始めて莊子に見る。

(八)孝經 孔子及び曾子の孝道に關する言を曾子の門人が編著したるもので、一卷ある。其の文は、中庸に比すれば平易である。人倫の大本は親子の至情に原くものなることを力説せるもの、論語と並びて、孔子の道を知るに足る。秦火の際、河間の顔芝が深くこれを藏し置きたるを、其の子顔貞が河間の獻王に獻じたものを今文孝經といふ、それは漢代通用の隸書を以て寫されてゐたからである。後に魯の共王が孔氏の舊宅を毀ちて壁中より得たるものを古文孝經といふ、それは蝌蚪の古文で書かれた故である。孔安國は古文に注し、鄭玄は今文に注した。十三經に列するは唐の玄宗の注にして、宋の邢昺の疏、即ち孝經正義三卷がこれである。

(九)論語 は孔子の言行録にして、戰國の初め孔門諸子の手に論纂せられたものである。仁を説きて空論に落ちざる純然たる道德の書にして、大成至聖文宣王の偉大なる人格と溫良恭儉讓の風采を窺ふに足る。聖人の言や、平凡なるが如くして萬古不易の眞理を藏し、確乎不拔の根柢を有して、時間と空間とに超越し、永く燦然たる光彩を放つ。素より文學の書に非すといへども、字句簡勁剴切にして、修辭上の巧妙あり、充實せる内容と相俟ちて、愛誦措く能はざるものである。漢の初三種の異本、即ち齊人の傳へし齊

論は二十二篇にして、魯人の傳へし魯論は二十篇、景帝の時、魯の共王が孔子の舊宅を毀ちて得たる古論は二十一篇、各異同がある。前漢の安昌侯張禹は、魯論を本とし齊論を參酌し、所謂張侯論として世に行はれたが、遂に古論と齊論とは佚亡して魯論のみとなつたけれども、古のものとは大に異なる。十三經に列するは、魏の何晏の集解に、宋の邢昺の疏を加へたる論語正義二十卷である。四書には朱子の集註十卷を取る。宋元明より今日に及ぶまで、朱註が大に行はれて、其の右に出づるものは少い。然るに山鹿素行は始めて朱註を疑ひ、伊藤仁齋荻生徂徠など亦大に朱註を駁撃してゐる。それより我邦に於て朱註反對の聲が高くなつた。太田錦城の論語大疏、安井息軒の論語集説は、最も參考とすべき良書である。

(一〇)學庸 大學中庸は共に禮記の一篇なりしを、宋の程朱に至りて大學中庸を崇尚して別冊とし、四書に加へた。大學の作者に就いては古來諸説あれど、朱子は孔子の弟子曾子の作で、大人の學であるとして解く。而して經と傳とに分ち、脱文ありとし、補正改竄して注を施してゐる。即ち大學章句一卷がこれで、明_三明德・親_レ民・止_ニ於_レ至善_一を大學の三綱領とし、格_レ物・致_レ知・誠_レ意・正_レ心・修_レ身・齊_レ家・治_レ國・平_レ天下_一を八條目としてゐる。而して陽明學派は古書のまゝなる古本大學を用ひてゐる。中庸は孔子の孫子思の著す所で、孔子の道の偏せず倚せず、古今に通じ内外に亘りて謬らず悖らざるを説けるものである。子思は曾子に學を受けて、當時已に異端邪説の盛に行はるるを見て之を憂へ、遂に此の

書を著したのである。今傳はる中庸章句一卷は、程子の四書に配したるものに、朱子か注を加へたものである。

(一)孟子 鄒人名は軻、孔子に後るること百年餘にして、業を子思の門人に受け、嘗て齊の宣王梁の惠王に遊事せしも志を得ず、遂に去りて宋滕諸國に遊歴せしも、術の施すべきなく、退きて弟子萬章の徒と孔子の意を述べて、孟子七篇を作る。七篇の内容は仁義を旨とし、王道を説き、霸道を斥け、性善を主張して、楊朱・墨翟を極力排斥した。其の感情熾烈にして、想像と比喻とに富み、議論風發、意氣激越、さすがに古今獨歩の文學者たるの地歩を占めてゐる。孔子の溫潤圓滿なるに比すれば、圭角あり、鋒鋲ありて、全く其の趣を異にする。彼は思索家哲學者にして、此は雄辯家文學者である。養氣牽牛、性善・有爲神農之言の諸章の如きは、縱横自在三歎措く能はざるものである。而して漢以後、孟子は一般に普及せられなかつた。韓愈が之を推稱し、程門始めて四書に配してより、朱子に至りて一般に尊崇せられて復異論がない。十三經に列するは、後漢の趙岐の注、宋の孫奭の疏の十四卷である。四書には朱注の孟子集注七卷がある。外に焦循の孟子正義三十卷がある。

(二)爾雅 何人の作なるか明でない。周公の作といふものあれど、實は戰國末か漢初の書であらう。その内容は語言の解釋より、天地山水草木蟲魚禽獸等に至るまで、一々説明せるものにして、諸經中特に詩經に關するものが最も多い。要するに字書の類である。しかしこれを十三經の一に加へしは聖人の作

と信じたからである。爾は近、雅は正にして、其言近くして用多く、正しきを取る意義によつて名づけられたものであらう。十三經には、晉の郭璞の注、宋の邢昺の疏なる爾雅注疏十一卷を列してゐる。

(三)十三經 とは易書詩春秋三傳三禮論語孝經孟子爾雅を併せていふ。各注疏ありて、十三經注疏と呼ぶものが即ちこれである。

附説 四書とは論語孟子大學中庸をいふことは世人の普く知る所である。

(四)老子 一に道德經ともいふ。老子姓は李、名は耳、字は伯陽、周室の衰ふるや、關令尹喜の請ふがまゝに、道德に關する五千餘言を著し、與へて去るといふ。大道を論じ至徳を説くこと、微妙深遠にして、直ちに宇宙の實在を闡明せんとするもの、哲學的にして高遠なる思索に互る。其の道とする所は、孔子の所謂道に非ずして、絶對的形而上學の根據より、善惡の如き相對を許さざるものである。虚無を貴び、復歸を主張し、紛々たる道德律の煩瑣を一蹴して、名を絶ち慾を絶ち、無を以て本體とする消極的厭世的思想の結晶したるものが、即ち老子上下の二卷である。されど佛教の涅槃とは異り、老子の説く所は、自然に順應して生を全うするの法にして、敢て人爲を排するのみ、畢竟支那民族の現世を超越する能はざるものである。其の權謀術數を説くの矛盾に似て然らざるはこれが爲でめ。文字は極めて簡潔精鍊、稀に見る好文章である。或は莊周以後の僞作といふものあれど、其の戰國以前の書たるは疑ふべくもない。漢の河上公之に注して、上下二卷通じて八十一章となしたるは尙可なりと雖も、各章名

を附したるは、必ずしも老子の本旨に合ふものと謂はれない。魏の王弼の老子注二卷、明の焦竑の老子翼三卷、考異一卷は主要なる注釋書である。

(二五) 列子 鄭人列禦寇の著す所といふ。今八篇を傳ふるも、全部皆後人の僞作である。既に其の人の存在すら疑はしきものなれば、文の疑はしきは當然である。老子の流にして無我を貴び、權謀を好まざると、孔子を推賞して聖賢を罵らざるとを。東晉の張湛の注、唐の殷敬順の釋文がある。

(二六) 莊子 蒙の人莊周の著す所、老子の學を闡明にするもの、五十三篇十餘萬言が即ちこれである。莊子は孟子と時を同うし、かつて漆園の吏たりといふも、名利の念を絶ち、貧憊に甘んじて終身仕へず、逍遙自適して生を終る。老子よりも更に出世間的にして、死生を同視し、現實世界を厭離し、是非一如、無差別絶対の宇宙本體を透視して、遂に哲學の極致に到達し、豪邁の氣魄は、更に之を反轉して宗教的ならしめ、豊富なる詞藻は、錦心繡腸、句々珠玉を吐きて燦然たる一大散文詩たらしめた。李白杜甫の詩と共に漢土に於ける空前絶後の逸品佳篇といふべきである。此の書本五十三篇、今傳はるもの三十三篇、晉の郭象の注釋せしものである。内篇七篇は純然たる莊子の筆に成り、筆力勁健、詞藻絢爛、乾坤を一擲して超然現實世界と絶縁せる大文章である。外篇十五雜篇十一は概して後人の僞作たるの疑なきを得ない。莊子の言概ね寓言にして、比喩巧妙、擬人の法に於て特に諧謔を恣にして、而も熱涙があり、人をして飄々として羽化登仙し、悠悠太虚に浮遊せしむるの思あらしめる。晉の郭象の注十卷、

宋の林希逸の莊子口義十卷、明の焦竑は莊子翼八卷莊子闕誤及附錄一卷、清の林雲銘の莊子因等の注釋書がある。

(二七) 荀子 二十卷は趙人荀況の著せしものである。漢人が荀卿又は孫卿といふは此の人である。其の禮を崇び學を勸め、周公孔子の道を明にするは全く儒家の言である。篇中非十二子及性惡説は、後世の議論を沸騰せしめたるものなれども、荀子は敢て詭辯を弄するに非ずして、其の論する所皆根據を有し、孔子の正を得んとするものである。孟荀と並稱せらるれども、文章は遙に孟子の下に在りといふ。この注釋書には唐の楊棟の註が最も一般的であるが、その外に清の王先謙の荀子集解、物徂徠の讀荀子、冢田大峯の荀子斷、久保筑水の増注、岡本保孝の荀子考などがある。

(二八) 墨子 宋の人墨翟の撰といへども、篇中子墨子と稱するより見ば、門人の撰するものといふべきである。其の兼愛説の弊は君父を無するに至る。然しながらこは禮といひ道といふ煩擾を避けて、道德の本質を説かんとしたるものである。孟子は口を極めてこれを排斥する。されど儉を崇び愛を推す所は世に實益あるべく、孔子の仁と歸する所を同うするもの。古、儒墨と並稱せられし所以である。清の畢沅の校せる經訓堂本があり、孫詒讓の墨子間詁がある。墨子と並稱せらるる揚子は佚亡して、纔に列子の中に一篇を存するのみ。揚朱は爲我即ち個人主義を固執して、社會の成立を否定したるものである。

(二九) 管子 齊の桓公をして天下に覇たらしめたる管仲の著せしものといふ。されど管子は、列子と齊

しく自撰にあらず、一人の手に成りしにあらずして、後人の蒐録せるものである。説く所禮義廉恥を重んじ、教育を興し、富國強兵の制を立つるが如きは、主權の絶対價値を否定し、政治經濟の實際問題に突入して、支那思想上、一新機軸を出したるものといふべきである。「倉廩實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る」とは千古不朽の名言である。二十四卷八十六篇は劉向の叙録に係る。法術家の言と共に黜けられて殘闕を生じ、宋に至りて十篇を失ふ。此の内、經言八篇は管子の手に成れりと安井息軒いふ。明の劉績の管子補注二十四卷、清の洪順煊の管子義證八卷、安井息軒の管子纂詁十卷がある。

(二〇) 韓非子 韓非は韓の庶公子で、李斯と共に荀卿に事へ、秦に使用して始皇に殺さる。刑名法術の學を説きて、支那南北の思想を混和し、實際社會に對して更に切實なる一大思想を構成した。帝王の神聖と法律の絶対價値を認めて、信賞必罰法治至上主義を標榜するに至りしは、當時の世と彼の境遇に於て止むを得ざるものがある。刑名とは形名の謂にて、名實相合はしむることである。人或は其の刻薄にして思少しと云ふものあれど、人間の虚偽陋劣殆ど見るに堪えざる醜事に對しては、自然に全身の不平滿腔の熱血の迸出を見るものである。頭腦の明晰緻密にして論理の透徹、思索の直截明快なるは亂世に施して益あるのみならず、一貫せる内容と文致とは實に長に泯滅すべからざるものといふべきである。元來韓子と稱せしが、宋以後に韓愈と區別して韓非子と稱した。二十卷五十五篇、多少の出入はあれども、多く舊を失はない。清の顧廣圻の識誤、物徂徠の讀韓非子、太田方の韓非子翼義、蒲坂圓の韓非子纂聞は

皆參考すべきである。

(二一) 戰國策 國策ともいひ、戰國策士の謀策を國別に集録したるものにして、漢の劉向が編次せるものである。其の縱論横説あらゆる手段を盡し萬乘の人君を掌中に翻弄し去るもの、獨り形式的修辭上の巧緻なるのみならず、膽力あり氣韻ありて、字々句句々雄偉の氣魄に富めるは、先秦屈指の歴史文學として推尊すべきである。また周の安王より秦の始皇に至る二百四十五年間、國を集むる十二、左傳國語の後を受けたる一大史料ともいふべきである。漢の高誘の注三十三卷、元の吳師道の補正戰國策注十卷がある。

(二二) 孫子 周の孫武の著せし兵法の書にして、凡そ十三篇。文簡勁にして意深遠、純然たる春秋の筆にして、兵家の秘訣を述べ盡くして萬世の法となる。漢書藝文志に八十二篇といふものは、後人雜篇を採りて附益せるものである。魏の武帝の孫子註三卷、外に清の孫星衍の校訂した孫子十三卷は良書である。

(二三) 吳子 吳起の著せるもの一卷六篇、用兵の術を説きて、而も禮を崇び教訓を明にし、持論正しきは、曾て曾子に學ぶを以てである。されど吳子が果して吳起の著せるものなるや否やは半信半疑の間にあるもので、これを孫子に比すれば、たしかに其の後に墜若たるものである。

(二四) 尉繚子 戰國の時魏の人尉繚の著せしもの、一卷二十四篇がこれである。漢書藝文志に三十一篇

とあれば、七篇は既に散佚したるものであらう。兵法を論ずること極めて精緻、奇警、深刻なるものが多い。いはゞ此の書は古兵家の格言要語録ともいふべきであらう。

(二五)司馬法 司馬は周の軍官である。齊人司馬穰苴が用兵の遺法を撰したるもの一巻、名づけて司馬法といふ。實は齊の後人の追輯したるものにして、本百五十篇といへども、殘缺して殆ど存せず、隋志に二卷とあるは、後人の僞作であるといふ。

(二六)六韜三略 六韜は周の太公望呂尙の撰といへども、實は後人の僞作にして、文武虎豹龍犬の六目は莊子の金版六韜の語に因りて附會したるものか。されど此の書は、用兵の秘訣として孫子と共に後人の愛讀する所、其の作も陳隋以前のものたるや明かである。三略は黃石公が張良に授けられし兵法の書である。人或は三略はその本は六韜と共に太公望に出づといふものあれど、信ぜられない。上中下の三卷で、略とは策略の謂である。此の書も亦後人の僞書にて宋以前に成るものである。

(二七)七書 孫子・尉繚子・司馬法・六韜・三略に唐の李靖の李衛公問對三卷を加へていひ、又武經七書ともいふ。それは宋の元豐年中に右の七種の書を以て武學に頒ち、號して、七書と名づけたるによる。

(二八)國語 左傳の著者左丘明の筆になれるもの、春秋左氏傳に對して、之を春秋外傳ともいふ。外傳とは猶ほ篇に内篇、外篇の稱ある如く、正傳(左傳)に對して外傳といふたのである。詩經にも韓詩外

傳あるが如き、即ちこれなり。或はいふ、この書は左傳の材料としたるものなれば、文も善惡混淆すと。それ或は然らむ。吳の韋昭の注、清の汪遠孫の國語校注本、薰增齡の國語正義など參考にすべきものがある。

(二九)孔子家語 眞書は佚亡して存せず。魏の王肅が孔安國に假託して孔子に關する傳記を集録したるものなれば、雜駁にして信じ難きものが多い。されど孔子の遺言逸事を蒐めたるは、此の書のみなれば、亦多少參考に資すべきである。

(三〇)呂氏春秋 秦の相國呂不韋が其の賓客を集めて撰述せるものである。十二紀八覽六論すべて二十卷、當時のあらゆる古書を探りて、儒墨名法兵農等に入し、以爲らく天地萬物古今備はらざるなしと。その取る所に古の眞なるものありて、後人の考證に資するに足る。筆法は初に抽象的論義を掲げて、實を擧げ喩を引きて演繹し、更に歸納して極めて明晰である。思索の深刻にして透徹なるは韓非に及ばずといへども、亦非の弊を救ふことが出来る。

(三一)新語 漢の陸賈の書、二卷十二篇がこれである。文中に闕字が多い。説く所は尊王はありて、霸を卑み、譎詐を斥け、孔子を宗として、多く春秋論語の言を引く。

(三二)新書 孝文帝の博士賈誼の作、漢書藝文志には單に賈誼五十八篇といひしを、隋志に新書の目が見えて、賈誼新書といふに至る。賈誼は經世家にして思想家である。深遠なる思想と非凡なる天才と

は、縦横自在の筆力に因りて、雄偉卓越せる大文章となりて顯はれた。本の五十八篇散佚して、後の學者が彼の本傳に就きて鈔出し、篇名を附して其の數を足す。故に其の粹は漢書に盡きたるものといふべきである。治安策・過秦論の如きは千古不磨の雄篇として激賞せられてゐる。

(三) 韓詩外傳 漢の文帝の博士韓嬰の述べし詩經の傳注である。古事古語を引き、これを證するに詩句を以てしてゐる。その解説が毛詩と相合はざる所があるのは、古來詩經に於ける齊魯毛韓の四家が各その門戸を張つて傳説を異にしてゐたことが證明せられるのである。その内傳は早く亡びて、外傳十卷のみが存する。

(四) 淮南子 漢の文帝の弟の子淮南王劉安の作、呂氏春秋と齊しく賓客と共に論述する所である。漢志には淮南内篇二十一篇、外篇三十三篇と著録してゐるが、今は唯内篇二十一篇を傳ふるのみである。其の内容は老莊思想にして虛無活潑を主としてゐるけれども、本來一人の作でない、蘇飛、李尚、左吳、田由など八人は蓋し老莊趣味を宣傳したであらう、けれども諸儒大山小山の徒も編述に従事したのであるから、老莊の道徳を鼓吹する一方には孔孟の仁義をも主張してゐる。畢竟雜駁の書であつて、氣力に乏しく、情熱なく、古人の糟粕を嘗むるものといはる。たゞ詞彩瞻麗にして濃豔なる所は取るべしと雖も、徒に潤色を事とし、六朝文學の俑を作つてゐる。呂氏のものに似て遙に劣る。高誘の淮南鴻烈解二十一卷は最も權威あるものである。他に我國の岡本保孝の淮南子疏證六卷は参考すべきである。

(五) 新序説苑 前漢の末劉向の著せしものである。新序十卷は戰國より漢初に至る百家の傳記を探り、類を以て集めたるものにして、教化を益することが大である。説苑二十卷も亦百家の傳説を探りて、軼事逸話を列擧したるもの、文章は平易で初學者を益することが尠くない。その子劉歆は博學宏通多くの諸書を校覈し、父の志を繼ぎて七略を著す。七略は今傳はらざれども漢書藝文志はこれによりて成る。即ち目錄學の嚆矢であることを忘れてはならぬ。

(六) 法言 揚雄の撰にして揚子法言ともいふ。聖人を尊び、王道を論じ、論語に倣ひて十三卷を著す。彼は別に易に倣ひて太玄を作る。太玄は文學書といふよりも寧ろ哲學書といふべきである。また殊域隔絶の俗語を蒐録せるものに、揚子方言十二卷がある。

(七) 論衡 後漢の王充の著で、三十卷八十五篇ある。彼は世を憤り俗を嫉むの士である、故に彼の志は善を勧め邪を閉ぢ諱を訂し病を砭するに在りしも、彼の議論は往々矯激に過ぎてゐる。天命を論じ自然を説き災異妖怪を辨するは尙ほ取るべき所もある、問孔刺孟の諸篇に於て孔孟を譏るが如き、皆彼の胸中の不平より出でしものである。しかも當時蔡邕は一世の大儒を以て是の書を愛秘して己の談助と爲して論鋒を鋭くしたといふ。

(八) 潜夫論 後漢の王符の著、十卷三十五篇、彼は耿介にして顯達を得ず、隱居して政の得失を論じ、明察にして時弊を看破し、議論醇正なることは、王充の論衡に勝る萬々である。

(三九) 風俗通義 十卷、略して風俗通ともいふ。後漢の應劭の撰で、卷毎に總題あり、題毎に散目ありて、其の事を詳にし、案語を附して得失を辨する。其の序にいふ、流俗の過誤を通じて義理に該するを以て風俗通義といふと。物類の名號を辨するは白虎通に似、流俗を糾正せるは論衡に似てゐる。

(四〇) 白虎通義 後漢の班固の撰四十四篇、略して白虎通ともいふ。肅宗の建初四年諸儒を白虎觀に會し、五經の異同を講じ、白虎道德論を作る、後に班固が撰集して書を爲し、初めて白虎通と名づけたものである。書中間と讖緯に及ぶと雖も、古義を存するが故に、今に考證家の依據する所となる。

(四一) 申鑒 一に小荀子ともいひ、後漢の荀悅が政權の曹氏に移るを見、謀用ひられず、志成らざるを以て、此の書五篇を作る。政治の概要、時事の急務を述べ、義理を正し、禮祥讖緯を辨するは、皆儒家の本領とする所である。明の黃省曹が之に注を施したものがあつた。

(四二) 文選 モンゼン 梁の昭明太子蕭統の編次せるもの、本三十卷なりしを、唐の李善が注して六十卷となし、今に傳ふ。即ち周秦以來の韻文散文を集録したるものである。文章の淵藪にして、唐宋科擧の士の尊ぶ所となり、我國にても古くより愛讀せられてゐる。李善の注尤も善く、他に五臣注文選がある。これに李善注を加へて六臣注文選といふ。

(四三) 玉臺新詠 陳の徐陵の撰で十卷ある。漢より梁に至るまでの詩を録載したるものにして、何れも綺羅脂粉のものなれども、未だ古を去ること遠からず、詩を研究するものは、文選と共に必讀すべきものである。

(四四) 詩品 梁の鍾嶸の撰に係る三卷。漢魏六朝百二十人の五言古詩を、上中下の三品に分ちて批評を加へたものである。

(四五) 楚辭 楚の大夫屈原が作れる賦騷を集めたるものにて、初め劉向が屈原、及宋玉、景差の賦を輯め、漢の賈誼淮南小山東方朔嚴忌主褒の諸作及自作の九歎を以て十六篇とせるものに、王逸が再び自作の九思及班固の二叙を加へて十七卷と爲し、これに注釋を加へた。宋に至り晁補之は補注を作り、朱熹は楚詞集注八卷辨證二卷後語六卷を著した。

(四六) 太白詩集 唐の李白字は太白、才氣俊逸にして、初め任俠の風を希求し、後に仙風道骨と爲り、その詩は土を期せずして神韻自ら具はる。古體・近體に兼ね長じてゐるけれど、詩及樂府にも妙を得た特に絶句に至りては、天馬空を行くが如く、實に古今獨歩と稱せられる。其の詩集は廣く和漢の詩人に愛誦せらる。

(四七) 杜甫詩集 李白と同時の人にして、字は子美、名は甫の作れるもの。甫は慷慨家にして情に厚く、安祿山の亂に遭うて、流離辛苦の裡、經營慘澹千鍛萬鍊して其の詩を成す。一面より見れば、當時の狀態を知るべき史詩ともいへる。李白と全く反對の性格である。其の詩の長所は律にありて、白の絶句と共に歎稱せられてゐる。

(四)白氏文集 唐の白居易は樂天、香山居士と號す。其の性格は樂天的にして、詩風は平夷で極めて俗耳に入り易く親み易ければ、田夫野人に至るまで廣く一般の吟誦する所となり、鷄林を越えて、我が國に入り、我が文學は殆ど其の影響を蒙らざるなきに至つた。今に存するもの三千八百四十首、七十一卷。長恨歌・琵琶行・遊悟眞寺詩は稀に見る長篇である。友人元稹が長慶四年、自ら編纂して、二千九十一首とし、これを白氏長慶集と曰ひ、且つ序を作つた。

(四)寒山詩集 二卷、唐の國清寺の僧寒山の詩、存するもの三百三首を集めたるものにして、同寺の僧拾得及豐干の詩をも附載する。多くは頌偈に類し、佛教の大乗思想もて一貫したるものにして、證道歌も亦觀るべきものがある。

(五)蒙求 唐の李瀚の著三卷。經史子中より古人の逸話を採り、相類似せるものを對偶せしめ、四字句の韻語を以て標題とし、記誦に便にしたるもの。易の蒙卦の「童蒙求我」を以て書名とする。世々童蒙の教科書として盛に誦せられたもので、宋の徐子光がこれに注してゐる。十七史蒙求、純正蒙求、左傳蒙求等は、皆これに倣ひて作れるもの、我が桂廣保は蒙求拾遺三卷を著し、墨神直臣は續蒙求三卷を著した。

(五)東萊博議 東萊左氏博議又は左氏博議ともいひ、宋の呂祖謙、號は東萊の著で、百六十八篇二十五卷ある。其の子弟と共に左傳の治亂得失を論ぜしもの、問、文に冗長なる所あり、論に奇矯なる所あれども、博引旁證、初學者の爲に極めて有益なるものがある。我が阪谷朗廬の評注せる瞿世瑛本がある。

(五)東坡全集 宋の蘇軾の詩文集である。百十五卷。

(五)三體詩 宋の周弼が唐人の詩を撰集したるものにして、六卷ある。三體とは七言絕句、七言律、五言律をいふ。清の高士奇が元の圓至の注を補うて、これが補注を作りしものがある。

(五)文章軌範 宋の謝枋得、字は君直、號は疊山の撰にして、漢晋唐宋の文章六十九篇を舉業者の爲に選集せしものにして、放膽小心の二格に分ちて論次せるものである。此の書は宋末に編纂せられたるものにして、科擧の士の指針となり、我が文學の人士にも盛に讀誦せられて來た。随つて講義注釋の類は甚だ多い。明の鄒守益は之に倣ひて、續文章軌範を作り、我が頼山陽は韓柳歐蘇の文を集めて謝撰拾遺と名づけた。

(五)近思錄 宋の朱子と、呂祖謙との共撰せるもので、十四卷ある。宋の道學者周濂溪程明道程伊川張橫渠四家の言を採り、修身齊家治國など日常に切要なるもの十四門六百二十二條を抄出したるものである。清の江永の近思錄集注十四卷、我が佐藤一齋の近思錄欄外書等大に參考とすべきものである。

(五)小學 宋の朱子の撰とするも、實は門人劉子澄の撰に成る。内外二篇に分ち、立教明倫敬身稽古嘉言善行の目を立て、灑掃應對坐作進退より、道德の格言、忠臣孝子の事蹟を集録したる學童の修身書である。明の陳選の小學句讀十卷、清の高愈の小學纂注六卷が普通行はるる小學書である。

(五七)水滸傳 元の羅貫中の作といふものあれど、施耐菴の作とするが普通。宋末に成りし宣和遺事を粉本とし、宋の徽宗の世に起れる群盜宋江以下三十六人の事蹟を以て其の骨子とする。全篇凡そ百二十回にして、結構雄偉、文章豪壯、支那小説中の白眉と稱せられる。清の金聖嘆の批評本が一般に行はれてゐる。

(五八)西廂記 元の王實甫の作、唐の元稹の會真記に基く。洛西の書生張珙に崔相國の女鶯鶯を配し、男女相國の情を描寫せしもの、その詞筆は、濃艷精妙、後人の喝采を得るに足る。全篇十六齣、續撰四齣より成る。此の書に金聖嘆及李卓吾の評を加へたるものが尤もよい。

(五九)琵琶記 元の高則誠の作、唐の小説を粉本とすといふ。蔡邕が最愛の妻趙五娘を置きて、官に京師に就きて富貴を致す。勅命否み難く牛丞相の女を娶る。郷家を思へども歸省を許されず、五娘は二親を喪ひ夫を尋ねて、行々琵琶を弾じ長安に入り、牛氏の女に救はれて夫に會ふ。鬻二妻を拉し始て歸郷し、親を葬りて團樂の一家をなすに至り、勅命ありて夫婦三人官爵を授けられたりといふ變化に富む戯曲。

(六〇)三國志演義 元の羅貫中の作で、陳壽の三國志を取りて、小説的に潤色したものである、けれども水滸傳に比すると大に遜色がある。

(六一)西遊記 作者未詳、明の小説として最も著名である。全篇百回、唐の玄奘が天竺に赴き經を求むるの話に假り、孫悟空猪八戒沙悟淨の三怪從者を配し、周流十四年、具に難艱を嘗めて求法し、畢に大家禮拜すといふ幽玄なる佛理を解ける教訓小説で、中には道教に關する事實多く、漢代小説に其の材料を取れるを見る。通行本に悟一子の評せる眞詮といふのがあつて、章句の義を釋明して參考に便である。

(六二)金瓶梅 西門慶、潘金蓮の情話より開展したる複雑なる性格を描寫せる小説にして、其の後の覺後禪・痴子婆傳の如き淫書の俑を作すものである。元の水滸・三國・明の西遊・金瓶・併せて四大奇書の目がある。

(六三)青邱詩集 明の高啓字は季迪、警敏にして詩文に長じ、就中詩を絶技とする。文詞詩を集めたる其の全集がある。金澶が其の詩を集めて注を施したるものに青邱詩集がある。其の数は二千首に及ぶ。

(六四)唐詩選 明の李攀龍の撰と稱するも、實は攀龍の撰した古今詩刪の中より唐の詩だけを選抜したもので、明末の書估の手に出版せられたものである。その内容には五七言古詩・五七言律・五言排律・五七言絶句の七部、百二十六人四百餘首を集録して七卷とし、滄溟文集の選唐詩序を卷頭に收載してゐる。されど我が國には古くより三體詩と共に行はれて之が注釋書も亦多い。

(六五)滄溟集 李攀龍の撰、明の揚日賓の校に係る。秦漢絢爛の文に倣ひ、盛唐雄麗の詩に學ぶ。所謂

修辭派の詩文にして三十一卷ある。

(六六)古今詩刪 李攀龍の撰三十四卷。漢魏六朝より宋元を除きて唐明に至るまでの醇正なる詩を集録したるものにして、唐詩選はこの唐の部分を取りて増減したるものである。

(六七)古文眞寶 前集三卷、後集二卷。前集は魏晉唐宋作家の文を載せ、卷頭の勸學文以下、五七言古風・句・歌・行・吟・引・曲に類別してある。後集は漢より宋までの古文を集めたものである。其の何人の手に成りしやは明かならざれども、古より我邦人に愛讀せられてゐる。一説には黃堅の撰集であるといふ。

(六八)陽明全書 明の王守仁、字は伯安、號は陽明の文集にて三十八卷ある。語錄三卷、文錄五卷、別錄十卷、外集七卷、續編六卷、年譜五卷、世徳記二卷、主として門人錢德洪等の編する所。陽明は知行一致の説を稱へ、陸象山より出でて、別一派を創始す。哲學上の一進歩にして、同時に文學者として一代の巨擘である。

(六九)傳習錄 三卷は王陽明が門人に答へて其の學を傳授したるものを、門人徐愛等が編次せる語錄にして、論語學而篇の「傳不習」の語を取りて書名とせるものである。別に補遺及附録をも載せてある。

(七〇)菜根譚 明の洪自誠の著二卷。語は人情の自然に出でて文雅風流、道學語録の書である。書名の由來は王信民の「咬得菜根、百事可做」の語にとる。

(七一)性理大全書 明の永樂十三年、胡廣等が勅命によりて編輯したる、宋の道學者百二十家の説を採集して、九種十三類七十卷を成し、四書大全、五經大全と共に三大全と稱せられてゐる。清の康熙帝はこれを節略して性理精義を撰した。

(七二)漢魏叢書 漢魏六朝の書を蒐録したるもの、初め三十八種、明の程榮の刊校に係る。後に何允中が三十八種を増して七十六種とし、又或は八十六種、九十四種とするものがある。古書を看んとするものには必讀の書である。

(七三)唐宋八家文讀本 略して唐宋八家文ともいふ。清の沈德潛の撰に係る。初め明の茅坤が唐宋八大家文鈔を編し、清の儲欣これに増補して唐宋十大家全集録を編む。德潛の八家文讀本は蓋し二氏の撰を參酌したるものである。唐の韓愈の文六、柳宗元の文三、宋の歐陽修の文五、蘇洵の文三、蘇軾の文七、蘇轍の文二、曾鞏の文二、王安石の文二、合して三十卷ある。每篇評點を加へ、初學文を學ぶもの軌範としたるものである。

(七四)通志堂經解 清の納蘭成徳の編で、詩、書、易、春秋、三禮、孝經、論語、孟子、四書、總經解の十類に分ち、百四十餘種を收録してゐる。清人の經解を集めたる皇清經解と共に、經書を修むるもの坐右に備ふべきものである。

(七五)隨園詩文集 清の袁枚字は子才、詞藻富贍、詩文に長じ、上下一般に愛讀せらる。此の他隨園詩

話がある。又隨園三十種には、詩文・尺牘・詩話・雜著を収めて、凡て二百四十一卷、今に行はれてゐる。

(七) 甌北詩話 清の趙翼字は雲松、號は甌北の撰にして、十卷と外に續二卷とがある。李杜韓白蘇陸元高吳查十家の詩を評論し、傑作には論評を加へたものである。又甌北全集ありて、著書七種百七十六卷を集めてゐる。

(七七) 皇清經解 清代儒者の經解を集めたる書、百八十四種、千四百八卷、訓詁考證の士の大に參考とすべきものである。王先謙の續經解があり、二百九種、千四百三十卷は、前編の遺漏を補ひ、兼ねて近世學者の著、曾國藩俞樾の著作の如きも其の中に列してゐる。

(七八) 史記 漢の司馬遷の著にして、もと太史公と名づけしを、後に史記と改稱せられた。武帝太史公の官を置くや、父の司馬談が其の任に膺り、古今の史書を錯綜して一史を成さんとし、中道にして卒した。

遷は太史公となり、遺志を繼ぎ、左傳・國語・戰國策・世本等を刪定し、上は黃帝より下は漢武に至る三千餘年の事蹟を編次した。實に紀傳體の祖にして、後の修史のものも殆ど全く此の範を出でない。十二本紀十表八書三十世家七十列傳、凡そ百三十篇、本紀は帝王の始末を叙し、表は世系年譜を記し、書は禮樂刑政等を載せ、世家は諸侯及功臣の封ぜられしものを誌し、列傳は著名なる諸種の人物を録したるものである。黃帝以前の荒唐を採らず、項羽を本紀に、孔子を世家に列するなど、史家として卓絶なる

識見を有するのみならず、文章が縱橫自在で、細を穿ち微を發し、一入神の筆もて、千載の下其の人物をして、生動活躍せしめてゐる。劉宋の裴駟の集解、唐の司馬貞の索隱、張守節の正義がある。明の萬曆に至り、凌稚隆は評林を作つた。今日一般に行はるるは即ちこれ。

(七九) 漢書 前漢書又は西漢書ともいひ、百二十卷ありて、後漢の班固字は孟堅の撰、前漢十二世二百三十年間の紀傳體歴史である。固の父班彪が遷の史記に繼ぎて紀傳を作る。十篇にして中途に卒し、固之を繼ぎて高帝より平帝に至る紀表傳志百篇を作る。後、事に坐して洛陽に獄死し、書も亦散佚す。固の妹班昭は博學能文、和帝は之に命じて輯校せしめて、八表天文志等を補ふことを得た。初の私撰は此に於て官撰となつた。班氏父子兄妹三人の手を経て完成したる漢書は、整齊にして法度ありとて、大に推獎するものがある。けれども史記に比較すれば、到底匹敵することは出来ない。唐の顏師古の注は最も權威あるものである。他に明の凌稚隆の漢書評林百卷、清の王先謙の漢書補注三十二冊などがある。

(八〇) 後漢書 六朝の宋の人范曄の撰したるもの。後漢二十帝の事蹟を記して、百二十卷ある。後漢の班固の光武本紀及列傳、載記などを取りて、材料は豊富であり、文章も彼自身に班固に愧ぢずと曰うてゐるけれども左程でもない。范曄以前に吳の謝承は後漢書百三十卷を作り、晉の薛榮は後漢記百卷を作り、司馬彪は續漢書を作り、華嶠は蔡邕等の東觀紀を刪定して後漢書九十七卷を作り、謝沈は後漢書百二十二卷を作る。范曄はかゝる衆説を參酌して、十紀十志八十列傳、合せて百篇と爲さんとせしも、十志の

未だ成らざるうちに誅せられた。梁の劉昭が之を補成し、唐の章懷太子が當時の學者に注せしめたるものが、今の後漢書である。史記に論あり、漢書に贊がある。此の書には論贊二つながらある。

(八一)三國志 晉の陳壽の撰にして、魏吳蜀三國の歴史を編輯したるもの、魏に本紀四、列傳二十六、吳に列傳二十、蜀に十五、凡て六十五卷。時人は皆其の善く事を叙べて、得失を明にしたるを稱した。實に漢唐の間に於ける稀に見る大史筆である。魏を正統とし、漢を改めて蜀とせしは、後人の議論ある所なれども、主權推移の點より見れば、魏を正當とするのが寧ろ當然である。宋の文帝の命によりて、裴松之が衆説を取りて注を施せるものがある。

(八二)資治通鑑 宋の司馬光の撰、二百九十四卷の外、目錄三十卷、考異三十卷、周の威烈王より五代に至る一千三百六十一年の歴史である。正史記傳に散見するものを取りて嚴格に撰叙し、前後連絡せしめたるものなれば、記事詳密なるのみならず、治亂興亡の跡が歴々として明に知られる。光は此の書に十七年の星霜を費して元豐七年に成る。英宗即ち資治通鑑の名を賜ふ。

(八三)通鑑綱目 宋の朱熹の撰なれども、門人趙師淵の手に成る所が多い。宋の司馬光の資治通鑑により、朱子其の要を提して綱とし、師淵に命じて目を作らしめたるものにして、五十九卷ある。

(八四)通鑑覽要 清の姚培謙と張景星の共著にして、通鑑の要を鈔出したるもの、三十七卷の編年史である。

(八五)通典 唐の杜佑の撰する所、二百卷ありて、劉秩の政典に倣ひ、食貨選舉職官禮樂兵刑州郡邊防の八門に分ちて制度文物を述べてあるもの。黃帝より唐の天寶に至る包括極めて廣大にして、義例最も嚴密である。

(八六)通志 宋の鄭樵の撰二百卷。三皇より隋に至る歴史にして、舊史を採摭して潤色を加へたもの。氏族六書天文地理禮樂器服官制等の二十略は大に見るべきものがある。

(八七)文獻通考 元の馬端臨の撰にして、三百四十八卷。杜佑の通典により、廣めて十九部門に分ち、經籍帝系封建象緯物異の五門を増し、凡て二十四門となし、通典を承けて南宋の寧宗に至る。宋の制度の詳博なるは、史實の闕を補ふに足る。

(八八)三通と九通 通典通志通考を併せて三通といひ、清朝乾隆敕撰の續通典・皇朝通典・續通志・皇朝通志續文獻通考・皇朝文獻通考を加へて九通といふ。

(八九)二十四史 一、史記・二、漢書・三、後漢書・四、三國志・五、晉書・六、宋書・七、南齊書・八、梁書・九、陳書・一〇、魏書・一一、北齊書・一二、周書・一三、隋書・一四、南史・一五、北史・一六、舊唐書・一七、唐書・一八、五代史・一九、五代史記・二〇、宋史・二一、遼史・二二、金史・二三、元史・二四、明史・以上を二十四史といひ、舊唐書・五代史・遼・金・元・明史を除きて十八史といふ。

(九〇)十八史略 元の曾先之が史記漢書後漢書三國志晉書宋書南齊書梁書陳書魏書周書

隋書南史北史唐書五代史宋史の十八正史より取捨括約して、太古より宋までの事蹟を簡略にしたるものにして、明の陳殷が音釋を附して七卷とした。初學者の課程本として我が國にも盛に行はれてゐる。従つて之が注釋の書も坊間に多い。

(九) 綱鑑易知錄 清の吳乘權字は楚材の著にして、上代盤古より元の末に至るまでの歴史である。朱子の通鑑綱目通鑑前編宋元通鑑などに原づきて叙述したるもの九十二卷。又朱國標の明鑑易知錄十五卷がありて、今は之と合刻してゐる。

(九二) 四庫全書總目 四庫全書提要ともいふ。支那に於て最も完全な書籍目錄解題の書である。清の乾隆帝の勅撰にして、經子史集の四部、四十三類に分ち、四部に總序を以て其の源流を述べ、綱領を提け、四十三類に小序を附し、詳に其の分併を陳べてある。條目の下に解題ありて、凡て二百卷、これに附屬して四庫全書考證百卷がある。後三十八年同帝の勅により于敏中等が解題を刪りて簡便にし、二十卷としたるものを四庫全書簡明目録といふ。阮元が四庫未收書目提要五卷を撰して、百七十餘種を集め、總目の遺漏を補へるものがある。

(九三) 千字文 梁の武帝の時の人周興嗣が次韻したるもの。四言詩二百五十句、隔句押韻、凡て一千字である。

梁の李暹の集注千字文跋には、晋の武帝の大夫鍾繇が始めて千字文を作つて天子に上つた。其後兵亂に遭つて之を失ひ、宋の武帝劉裕が王羲之に次韻せしめたが、つひに成らなかつた。更に梁の武帝が周興嗣に命じて成つたものが現本であると。按ずるに我が國に渡來した千字文は應神天皇の十六年に王仁によつて獻ぜられたとすれば、其の時の千字文は周興嗣の撰でなくて、鍾繇のものでなくてはならぬ。周興嗣以前に千字文があつたればこそ周興嗣の次韻とあるのである。要するに千字文は宇宙の事物大小を網羅して、一字の重出なきは、實に巧妙である。別本に廣千字文・易千字文などがある。

大正十二年六月五日印刷
大正十二年六月十日發行

定價金壹圓五拾錢



著者
編輯兼發行者
印刷者
發行所

東京市小石川區第六天町四十八番地 兒島 獻吉 郎
東京市牛込區揚場町一番地 外松 荒三 郎
東京市京橋區弓町二十五番地 高橋 郁三 郎
東京市牛込區揚場町一番地 帝國書院
電話牛込四四三一番

東京市牛込區揚場町一番地
振替口座東京三、三四九番
販賣所 螢雪書院

大阪市東區本町四丁目
振替口座大阪六九番
關西販賣所 三宅莊藏書店

此書... (Handwritten note on the right edge of the book)

323
606

終